

紅 萌

京都大学広報誌 ● くれなゐもゆる



楽友会館

1925年に京都帝国大学創立25周年を記念して建設。設計は、当時、京都大学工学部建築科助教授だった森田慶一氏。東京高等工芸学校（現在の千葉大学工学部）教授の森谷延雄氏による内装は大正建築の特徴をよく伝えている。2010年9月に改装を終え、当時の趣きを残して会議室や喫茶食堂を備えた会館として再生。京都大学の教職員の学術交流の場として活用している。国指定登録有形文化財

私を変えた、
あの人、
あの言葉

山西 惇
俳優

演劇との出会い

一九八一年、憧れの京都大学に合格したものの、学生生活を満喫してやろうという以上の将来的なビジョンが、その頃の僕にはまったくなかった。強いていえば、普通のサラリーマンにはなりたくないなあ、なんて漠然と思っ ていたくらいで、自分の将来のことなんて、なーんも考えずに大学に入ったのだ。本当に浅はかだった。大学に合格することが、手段ではなく目的になっ てしまっていた。

さて、ではどうやって学生生活を満喫するか？ 浅はかに考えた。クラブやサークル活動に勤しもう。スポーツはこの運動神経だ、最初からついていけまい。高校時代に少し齧った、アマチュアバンドならどうだろう？ しかし、バンド仲間ほとんどが浪人



◎やまし・あつし
1962年、京都市に生まれる。1985年に京都大学工学部石油化学科を卒業。「劇団そとばこまち」で演劇にめざめ、舞台や映像作品に欠かせない個性派俳優として活躍。「相棒」シリーズ(テレビ朝日)の角田課長役でもおなじみ。近年は「クイズプレゼンバラエティー Qさま!!」、「超タイムショック」(テレビ朝日)などクイズ番組でも活躍。最近の主な出演作は、舞台「PRESS～プレス～」、「奥様お尻をどうぞ」、「百年の秘密」、「いつか見た男達～ジェネシス～」、テレビ番組「サラリーマンNEO」シリーズ(NHK)、映画「相棒—劇場版—」など。

*多くの演劇人を輩出した伝説的な小劇場。1998年以降は、「HEP HALL」として営業

中あるいは東京の大学に入ってしまった。ボーカルだったとはいえ、なんの楽器もできない僕を誰が受け入れてくれるだろう？ 結局何も決められないまま、入学式からの数日を過ごしていた。そして運命の日はやってきた。忘れもしない健康診断の日だ。正門を入ったところで「劇団そとばこまち、入団説明会」のチラシをもらったのだ。芝居の世界なんてそれまで触れたこともなかったが、そのチラシのポップさと、端に書かれていた『中華風倭人伝』という次回公演のタイトルに魅かれて、大阪梅田の小劇場「オレンジルーム」*まで、人生初の観劇にいった。

驚いた。本当に面白かったのだ。高校時代、僕は文化祭のたびに仲間内でコメントを作って発表していたが、その何十倍もレベルが高く、そして面白かった。公演後すぐに入団説明会にいった。説明会とは名ばかりで、完全に入団オーディションだった。ただし、来た人間は全員合格していたが……。

それから、僕の学生生活は隣り間に

芝居に浸食されていく。そして、いつしか人生も。

あの時、チラシを受け取っていなかったら、芝居と出会っていなかったら、僕の人生はまったく違ったものになっていただろう。あれから三〇年が経つが、新しい台本を開くときのワクワクする気持ちや、初日前の胃が口から飛び出しそうになる感じはいまだに続いている。

僕は飽きっぽい性格だと思いが、芝居に関しては飽きることがない。つくづく芝居が好きなんだと思う。それほどまでに好きなものに出会えて、それを仕事にできて、それを通じて家族にも恵まれて、本当に幸せ者だ。あの時の、そしてこれまでのすべての出会いに感謝する日々だ。

英国の演出家ピーター・ブルックの言葉「演劇は自分と他人とが違うということを確認する作業です、これが僕の座右の銘だ。共演者、スタッフ、台本に書かれた役柄、どれをとっても自分と同じ人間なんて一人もない。それらをすべて受け入れ、出会いを楽しみ、お互いを確かめ認め合うところから演劇が始まる。そしてそれは、演劇に留まらず、人生そのものを楽しむ術なのではないかと、最近になって思うのだ。僕が演劇に魅かれ続ける理由は、そこにあるのかもしれない。

紅 萌

京都大学広報誌

2012
第22号

◎目次

- 2 巻頭エッセイ 私を変えた、あの人、あの言葉
演劇との出会い 山西 惇
- 3 巻頭対談
美しい自然と学問で若い世代を魅了したい
「もの」で「モノ」を伝える京都大学総合博物館
ゲスト 河野昭一
ホスト 大野照文
- 8 研究の最前線
中国文明とその源流を探る
——考古学からのアプローチ 岡村秀典
- 12 邁進・京大スピリット——学生たちの活躍
2011年度京都大学総長賞(点訳サークル)／
奇術研究会／剣道部／宮崎祐輔(NPO法人道普請人)
- 14 授業に潜入！「おもしろ学問」講義録
アフリカを食べよう 重田真義
- 18 ふりかえれば未来——モノ語る京大の歴史
屏風に名を残した京大教員たち
西山伸
- 21 京都大学をささえる人びと
地道な作業の積み重ねが
フィールド科学の発展につながると信じて
藤井弘明
- 22 京都大学の動き
追憶の京大追遠
- 24 ジェラルド・フィリップが京都に来た夜
山内久司

美しい自然と学問で 若い世代を魅了したい 「もの」で「こころ」を伝える京都大学総合博物館

大学創立百年の年に、伝統ある文学部博物館に自然史と技術史の部門を拡充して発足した京都大学総合博物館。大学博物館として例をみない規模と内容をほこる。なかでも自然史は、「生きものありき」、「ものありき」を原点に、自前の資料で生きた展示を構築。成果を競うのではなく、成果を共有することの社会的意義、そして若者にはものに触れる感性とすなおな感動のたいせつさを訴えたいと博物館設立を夢みた新旧の博物館長。世代を超えて手を結んだ二人が明かす誕生前後の内なる闘争とその信念



河野 ●博物館は研究者よりも、市民や子どもたちに来ていただくというのが、設立趣旨でした。近くの小中高生が土曜日の午後からでもこられるようにと、休館は月・火曜日になりました。ところが、修学旅行生にまで寄っていた内

容の濃いものにしようと、くふうしてきましたが……。
大野 ●毎週土曜日の「週末子ども博物館」は、すでに満八年です。京都大学の生や院生、専門的な知識をおもちの学会人たちが自分の研究を「もの」で説明する企画。「もの」を並べていて、「これ

なに？」と聞いてきたら答える。五分で帰ってもいいし、一日いてもよい。お兄ちゃん、お姉ちゃんたちとじゃれあっているうちに勉強の楽しさをわかってもらおうという意図です。
河野 ●そういう子どもたちが理解しやすい展示にしよう、写真を多用しよう

やって、これは成功していると思います。
大野 ●開館して一〇年がたつて本来なら展示を更新する時期ですが、京都大学の研究成果のエッセンスを集めただけに陳腐化しないですね。

河野 ●生物学において分子生物学が主流になるなかで、森林や生態系の自然史をしっかりと把握し、それを大学の施設で学生にも一般の方にも見ていただく。大学はこういう思想で研究しているんだと理解してもらうことはだいじです。大学や研究機関は競いあうだけでなく、成果を国民に開放すべきです。うちの博物館は、とくに小学生など若い世代に見てもらいたい。

大野 ●博物館は教員七人、事務職員四人、それに展示場のお世話をしただいているミュージアムスタッフ等の献身的チームプレーができています。うまくいっている背景には、これがありますね。

河野昭一
京都大学総合博物館 初代館長
大野照文
京都大学総合博物館 館長



博物館のエントランスホールで毎週土曜日に開催中の「週末子ども博物館」。京大大学院生を中心とするスタッフが、それぞれの専門知識や博物館の展示資料を活かしてコンテンツづくりに挑戦
10:00~16:00 参加無料(博物館の観覧料は必要です)

自然の情報をどう汲みとるか

河野 私は北海道の生まれで、小学校は山の中。学校帰りは道草くって、植物に触ったり虫を捕まえたりがとても楽しかった。子どもながらに、自然の多様な美しさを理解していたように思う。そういった体験が博物館をつくる糧になった。子どもたちが楽しめる施設にしたいと、子どもたちの体験をふり返りつつ発想をめぐらせました。

大野 ●私は下を向いて歩くタイプの子どもの石を集めてはポケットに入れて……。やがて、小学校六年の夏休みに京都御苑の横にあった益富寿之助先生の益富地学会館に寄せてもらったんです。先生は北海道から帰ってこられたところで、「これがアンモナイトや、すごいやつ」とリュックから化石を出してこられた。し

ばらくして帰ろうとしたら、さっきのアンモナイトを新聞紙に包んで、「はい、もって帰りなさい」。驚きました。私の人生は「もの」でつられて決まっちゃった。(笑)

河野 ●生きものありき、ものありきが原点。われわれの発想で捉えるのではなくて、自然の情報をどう汲みとるかがスタートです。だから、京大博物館は生きた展示になった。

大野 ●そういう河野先生はいつも「おれは北海道の田舎者で」と言わはるが、高校生で北海道大学に出入りして論文まで書かれていた秀才で、修士になるとカナダから「勉強にきなさい」と声がかかる。並みいる先生が引き留めたが、「二年したら帰る」と説得して……。

河野 ●空手形だった。(笑)
大野 ●カナダでも、行った先の指導教官が、「マスターにいてもしょうがない、

中学生になっても野原で植物を摘んだり、昆虫を相手に遊んだりしていたから死んだ親父なんかは、「あいつ、おかしいんだよな。いくつになっても葉っぱを採ってきては新聞紙に挟んどる」。ヒトも地球上の生きものの一員。周りの自然とどう折りあいをつけるか、知らず知らずのうちに自然史への意識が芽生えていた。

そういう時代があったからか、とにかく生きた展示にしたかった、現実を再現しなかった。写真も、自然を生きたと表現したいと、われわれが研究用に撮影していたものです。

これでは天下の京都大学が泣く

大野 ●そういうパワフルな先生が京都大学にこられたのが一九八十年代半ば。

しかし、植物標本を先生がご覧になったら劣悪なる状況にあった。

河野 ●そうです、当時は標本が増えてどうしようもなく、理学部の木造の倉庫に押し込んでいた。ところが、雨漏りする。大きなビニール・シートを被せていたが、夜中に雨が降ったらしいへんです。朝早くきて、急いで竹の棒でシートを突いて水をザーッと流す。それが当時の教授の仕事だった。(笑)

これでは天下の京都大学が泣く、なんとか新しい施設をつくらなくてはと、博物館構想がなんとか前進をはじめた。

大野 ●文系の先生方は、「京都大学ができてまもなく文学部陳列館をつくって資料をたいせつにしてこられた。理系の先生は、次から次へと前にいくから、後



◎河野昭一（かわの・しょういち）

京都大学総合博物館初代館長、京都大学名誉教授。生物学博士（モントリオール大学）。1936年、北海道に生まれる。北海道大学大学院に進学するが、新しい分類学を求めてモントリオール大学大学院修士課程に編入。26歳にして博士課程修了。ニューヨーク植物園研究員、京都大学理学部教授などをへて、1997年に京都大学総合博物館館長に。専門は種生物学。植物分類学に遺伝情報を活用する手法をとりいれた先駆者。植物の一生を観察して生態を調べる「生活史」の研究分野の草分けの一人でもある。湿地などの自然保護活動にも力を注ぎ、2011年に「南方熊楠賞」を受賞。

総合博物館の歴史

- 1897年 「京都帝国大学」創設
- 1914年 「京都帝国大学文学部陳列館」開館
- 1955年 「京都大学文学部陳列館」が文部省から「博物館相当施設」の指定を受ける
- 1959年 「京都大学文学部博物館」と改称。建物の老朽化のため改築
- 1989年 「京都大学自然史博物館基本計画」を作成
文学部博物館と新設の自然史博物館とを統合した「京都大学総合博物館(文化史資料研究部門と自然史資料研究部門の2部門から構成)を構想し、概算要求を提出
- 1995年 「京都大学自然史博物館計画実施プラン」を提出
- 1996年 「京都大学自然史博物館計画実施プラン」の概算要求を提出・了承
- 1997年 「京都大学総合博物館」発足
- 1999年 旧文学部博物館を文化史系展示場とし、自然史系展示場を新館として着工
- 2000年 「京都大学総合博物館新館(南棟)」竣工
- 2001年 一般公開を開始

河野 ●私の先祖は淡路島

の海賊の河野水軍の末裔で、北海道開拓に入った百姓の息子。母方は伊達藩で北海道に入植した。血の気の多さは先代譲りで、私のせいではないんです。(笑)

大野 ●標本をだいにしなさい。集めれば教育、研究ができると言い続けていた河野先生ですが、一方では展示場のない博物館をつくってもしようがない。

市民に門戸を開いて、研究のおもしろさを伝えたいといかんと。「へんに妥協的な案が出たら必ず潰したれ!」と

河野 ●なにか過激派みたいなこと言っていますね。(笑)

大野 ●当時の理学研究科長は私の上司の鎮西清高先生で、鎮西先生はどちらか



◎大野照文（おおの・てるふみ）

京都大学総合博物館の4代目館長、京都大学教授。自然科学博士（ボン大学）。1951年京都府に生まれる。京都大学大学院博士課程修了。京都大学理学部助手、助教などをへて1997年に総合博物館教授、2009年に館長に就任。子どもたちに本物にふれる感動を伝えたいと、「ものから入る学びの楽しみ」を導入する体験学習プログラムの開発にとりくむ。専門は層位・古生物学。先カンブリア時代から古生代にかけての爆発的な生物進化（カンブリア爆発）の研究者として知られる。多細胞動物の起源への関心からロシアやアフリカにも現地調査に出かける。

という紳士型。本部が、「一度つくってそれを発展させればよい」と提示した三千八〇〇平米案を持ち帰ってきはその日の夕刻に、それほど面識もない私が河野先生の電話で呼びだされて、頭から叱られた。

河野●そんなことがありましたか。

大野●はい、「そんな博物館では、いまあるものを収めるにも不自由する。ええ加減なものをつくってはだめだ」と。「お前の上司が正しいか、おれが正しいか」。すかさず、「そりゃあ先生が正しいですよ、そこから先生は学部長になれへんです」と私が言ったもんやからいよいよ怒らはって、「おれは学部長になるためにやっているのやない、この標本をどうするかだ」と。今にして思うと、鎮西先生と河野先生は、「表」と「裏」の絶妙な役割分担で、巧妙かつ愚直に学内外の世論を導いて、この博物館をつくりあげた名コンビでした。

京都大学にふさわしい博物館を

大野●そうして九七年の京都大学百周年の年に河野先生を初代館長に博物館ができる、私もスタッフでございませう。そこから珍道中です。

河野●次の世代にバトンタッチすべき施設と事業を用意し、受け継ぐ体制をつくろうということだったね。京都大学の出身ではない私に、太っ腹の寺本英先生が、「あとは任した。思いっきりやいなさい」と言ってくれたのが救いだった。事務官の信頼と働きも大きかったね。

大野●しかも、河野先生は鋭かった。重要などころでは絶対に退かなかつた。(笑) 当時は、五時を過ぎるといろんな事務室でおでんの匂いとかがしてきた。河野先生はビール瓶や缶ビールを掲げて「昼間の話の続きをいこう」、「おまえちゃんたち、これはわしらのためにやっているんやない、将来を見通してのことや。ぜひ力を貸してくれ」と。人にはそれぞれ立場があるんですが、それを超えて助けてくれはりましたね。

河野●そうでした。

大野●当時の事務長補佐も、酒を呑むとみんなにのり上げをくらう。「河野先生がここまで言ってい

るんやから」とみんなが言うても管理職然の顔をして、「わかってる、わかってるけど……」。ところが、次に会うと情報をいろいろ集めてくれていて、「こういう状況やから、こうしましょう」。

河野先生は館長になられても研究室で研究・教育されていて、ようやく手のあく夜の二〇時半ころに行くと、「ちょっと待つとれ」。で、キリのいいところで、「今日はどうやった」と戦略会議。それが毎晩だった。

河野●大学としての和を保ちながら目的を達成しようということだった。けんかする戦略ではなかったが、結果としてやっぱり……。

大野●最初は施設を準備する組織としての博物館が発足した。だから、「建物が建つかどうかは、きみらの腕しだい」と何度も言われましたね。河野先生は八面六臂のご活躍。標本は移動式書棚で収蔵することになったが、組織のあるべき姿、研究環境をどう整えるか、それには何平米の施設がいるかの説明書三点セット、合わせると厚さ四センチメートル。これをもって河野先生は当時の文部省に何度も足を運ばれた。

熱帯雨林のジオラマをつくりたい

大野●当時は井村裕夫館長。それを長尾真館長が引き継いで予算が通りました。河野先生が力を入れたのは地下の収蔵庫でした。国はこの面積でつくれないと認可しましたが、高さはなにもいいわな。そこで地下を二階ぶんの高さ四メートル強にして、二層式の

移動棚方式にした。理系だけで二〇〇万点もの標本がありますが、おかげでみんな収蔵できた。

河野●国は単年度主義の予算だから、展示施設も問題だったねえ。

大野●九七年に発足して三年後に南棟が竣工。これくらい規模の常設展示だとして、二、三年かけて企画・設計するものですが、準備を整えて公示・入札が終わってさあ工事となったのは八月。それでも一年三月末には一般公開しないといけないかった。

河野●多岐にわたる分野のバランスも必要だった。動物学や植物学、化石を含めた地質、生物学という括がりのなかで設計しないとイケない。乱暴なプランニングだったが、とにかくみんなが燃えていたね。

大野●それに京都大学は探検大学で、フィールドワークが盛んです。京都大学はマレーシアと連携して熱帯雨林を研究していて、河野先生はぜひとも熱帯雨林の生態系のジオラマをつくりたいとおっしゃって……。

河野●熱帯雨林を再現する企画は当初からあった。だけど、検討している最中に、その熱帯雨林を研究していた井上民二教授が乗った飛行機がボルネオ島で墜落、先生は亡くなら



熱帯雨林（ランピルの森）のジオラマ

巻頭対談 美しい自然と学問で若い世代を魅了したい

「もの」で「こころ」を伝える京都大学総合博物館



れてしまった。絶対にこれをやるぞと。大学の博物館としては異例でしたが、彼情熱を展示に組み入れようとした。研究者の志をも展示で見せたいと思った。

大野 ●生態学の安部琢哉、東正彦、中野繁の三名の先生がカリフォルニア沖での調査中に亡くなるなど、事故は重なりましたね。

河野 ●私たちがボルネオを訪ねると、巨木の森の樹冠に観察用の渡り廊下がつくってあった。よし、これを取り入れようと。だから、展示場の一階と二階を立体的な一体構造として、森林の景観をそこにセットした。

大野 ●井上先生が協力された淡路島での「ジャパンフロラ2000」の映像資料も提供していただいた。

河野 ●展示を立体的にしようとしたら、とんでもない構造になった。それでもイメージしていた姿が実現した。これだけの自然史博物館のある国立大学は、ほかにありませんよ。

文化史資料研究＋自然史資料研究

大野 ●大きさも断トツですが、それ以上に機能的な博物館になったことが素晴らしい。研究も教育も標本の収蔵もで

きる。しかも、大学の研究成果、教育成果を市民にわかりよいかたちでお伝えできる博物館です。

河野 ●しかも技術史も対象で、昔の手づくりの道具類も収蔵している。ああいう精巧な手わざの歴史があつて、今日の日本の生産技術がある。

大野 ●博物館には技術史の研究者もいますが、技術は生態系や人の生き方と関わるから、技術とか形、質をつくるフィロソフィーは大事ですね。

河野 ●だから、自然史と技術史の二つを柱にすることを早い段階で考えた。それにしても、議論は言いたい放題だった。京大らしさをどうつくるかにみなさん一所懸命だったね。

大野 ●しかし、けつして平和的ではなかった。(笑) 私が館長になったいまも、若い人は過激な提案をもつてくる。これをどうすべきか考えていると、やはり知恵が出てきます。

河野 ●意見をぶつけあいながら、なにが大学にとって重要かを考える。それに、次の世代のために知恵と情報をどういうかたちで残すかです。

大野 ●いまは「日本の哺乳類」の展示をしています。三高時代からの教材標本もある。それに、哺乳類で世界的に著名な本川雅治さんもいて、京都大学だけで日本の哺乳類研究の全容を見せられる。ヘビ・トカゲでは疋田努先生、両生類では松井正文先生がいる。しかも、標本の利用が便利になったから、海外からもたくさんの方々がいらつしやる。

2004年度以降に開催したおもな展覧会(抜粋)

2004	「森と里と海のつながり—京大フィールド研の挑戦」 「新世紀を創る—京都大学の工学と貴重技術史資料」 「考古学を愉しむ!?!—新堂慶寺出土瓦の分析」
2005	「日本の動物はいつどこからきたのか 動物地理学の挑戦」 「マリア十五夜義園展」 「火星の素顔—Mars Express がとらえた3次元画像」 「コンピュータに感覚を 京大情報学パターン情報処理の系譜」
2006	「百年が集めた千年」 「湯川秀樹・朝永振一郎 素粒子の世界を拓く」 「東アジアから世界へ—魔鏡」 「京都大学所蔵近代教育掛図展 目で学ぶ、絵で教える」 「地図出版の四百年 京都・日本・世界」
2007	「京大の至宝—蘇る宝たち」 「生態学が語る不思議な世界 生物の多様性ってなんだろう?」 「2008年子年—京都大学と野ネズミ研究」
2008	「京の宇宙学—千年の伝統と京大が拓く探査の未来」 「シルクロード発掘70年—雲岡石窟からガンダーラまで」 「交錯する文化」 「京都大学総合博物館学術映像博2009」
2009	「広がる地図文化—京都大学地図コレクション」 「日本文化に見た夢 お雇い外国人建築家コンドル先生」 「ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界」 「物からモノへ モノ学・感覚価値研究会展覧会」 「いま、御土居がよみがえる」 「科学技術Xの謎」
2010	「昆虫標本からさぐる環境変動—花を訪れる虫たちのいま、むかし」 「龍馬と半平太の手紙」 「呪いの鉛板」 「クニマス—70年ぶりの生存確認」 「まぶさび展」 「小惑星探査機『はやぶさ』帰還カプセル特別公開」 「石舞台古墳発掘の記録」
2011	「花の研究史 京都大学の植物標本」 「埃及考古 ペトリーと濱田が京大エジプト資料に託した夢」 「INCLUSIVE DESIGN NOW 2012」 「ジョルジョ・ヴァザーリのウフィツィ: 建築とその表現」
2012	「京大日食展 コロナ百万度を超えて」 「陸上脊椎動物の多様性と進化—京都大学の挑戦」 「大学は宝箱! 京の大学ミュージアム収蔵品展」

■ 企画展 □ 特別展

いま、東アジア地域の中国、ベトナム、台湾、韓国等々を中心に研究者のネットワークをつくりかけています。九月には二六か国(地域)四二大学が加盟するAPPRU(環太平洋大学協会)が主催の大学博物館シンポジウムを京大で開催、ホスト博物館として標本ベースの科学研究や教育をどうするかを議論します。

河野 ●京都大学のよいところは、地球上の自然をどのように把握し、理解するかを早い時期から国際的な視野のもとにやってきたことですね。

大野 ●京都大学は「リーディング大学」と表現されますが、最先端がリーディングで、標本はベーシック。しかし、ベーシックな分野でも環太平洋の拠点の一つとしての存在感が増しています。こんどの環太平洋のシンポジウムも、各国が競って、京都大学にデリゲーションを送りつけてくる。

河野 ●私思うに、日本のアドバンテージは北海道、本州、四国、九州にくわえて、奄美大島と沖縄があること。亜寒帯地域から亜熱帯地域までの多様性がこの島国に生物の多様性を生む原動力になっている。しかも、中国や朝鮮半島の森林は荒れて原形をとどめていないが、日本はこれだけ都市化が進み、

京都大学総合博物館 <http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>

開館時間 9:30 ~ 16:30 (入館は16:00まで)
休館日 月曜日、火曜日(平日・祝日にかかわらず)
年末・年始(12月28日~1月4日)

個人観覧料(1人)
一般 400円 / 高校・大学生 300円 / 小・中学生 200円



人口が過密であるにもかかわらず、断トツにいい自然をもっている。

私はつねに若い人たちに、自然の価値をフィールドで体験しなさいと言っている。いまは生物学にしても遺伝子の研究が主流です。これを否定はしないが、やはりまず自然ありきです。広い視野で世界を見、日本を見、自然を見る。そういう学生を育てるのがわれわれの仕事です。

大野 ●京都大学は、北は釧路の近くの標茶に北海道研究林があって、南には桜島に火山活動研究センターがある。各地に実験施設があって、地元と関わりつつ研究している。そういうところで訓練をつんだうえで世界に打って出る。世界各地の人たちと交流しながら学問を深め、同時に世界の人たちを受け入れる。

河野 ●日本人というのは、本草学の時代まで遡ってみても、自然から多くを受けとめる感性が豊かだと思う。自然から多くの情報を収集する。これは本草学の時代の書物を見るとよくわかる。じつに鮮やかな絵です。よくぞこままで精密に植物や生きものの姿を把握していたものだと思う。

やはり、「もの」ありきです。「こん

な虫がいるのか」、「生きものってこんなに美しいのか」という単純な感動がだいじです。生物多様性の面からみると、日本列島はほんとうに豊かです。日本人は、この国の自然の価値を分かちあっている。それが、自然をたいせつにしてきた日本という国だと思う。

知の統合としての博物館と感性

河野 ●学術資料の保存と研究に重点をおくと同時に、その成果をどうするかをスタッフ会議で議論しながら今日まできた。難しい時期をくぐって、それがいま花咲いた。密度の高い展示ができるようになったね。

どんな組織でもトップはトップとしての見識とリーダーシップがなければダメです。大野先生には、もう満幅の信頼を置いています。

大野 ●私以上にスタッフががんばっていますからね。企画展や特別展にしても、年に三つも四つもやっている。これは、全学の教員や学生の協力なしにはできません。しかも、自分の研究成果にならないのに、「大野さん、これをやったらどうや、あれもやったらどうや」と自分でどんどん墓穴を掘って手伝っていただける。(笑)

河野 ●京大のよさは百家争鳴。とにかく議論し、意見を統一しようという考えはあんまりない。言いたい放題で可能性を追求して、いざ立ち上がるときは一致するね。大学全体の知の統合が言われていますが、この博物館は統合するハブ的な役割をかなり担っている。

大野 ●私は、学内の智の出会いとところで「出合い系」博物館と呼んでいます。河野 ●一方で、研究者が生ので説明することも重要だと、私はお子さんを博物館で案内もしています。

大野 ●先生は、講演に行かれた宇治市の山奥の小学校の児童が気に入って博物館に連れてこられましたね。

河野 ●全員で四〇人ほどの小学校ですね。気持ちのいい子たちです。「近くの森や小川で体験学習するのはどうですか」と子どもたちを連れ出す許可をいただいで、生きものを見てもらう。すごいんですよ、一年生、二年生のチビたちが遠くから、「先生、これなんですかあ」とか言って昆虫を手にとってくる。子どもたちってね、自然に接すると自然の美しさとかおもしろさを学ぶんです。それで、この子どもたちを博物館に連れてきたんです、土曜日に。みんなガラスに顔をつけて昆虫をみていましたよ。

大野 ●自然をみる眼を養っていただきましたね。生きた自然をどうみるか。博物館でもそれを熟帯林の模型で感じてもらえるようにしてある。

河野 ●大学博物館は、研究した成果を知っていたことが基本的な役割です。けれども、私たちの発想は自然のすばらしさをいかに再現するかだった。学術的な知識だけでなく、若い感性を育てることも重点を置いてきました。子どもたちが観察している姿を見ると、子どもたちの眼はやっぱり据わる。われわれなりの目的は達成できているなど。

情報ネットワーク「知の宅配便」

大野 ●近ごろの人は全体像を見る力が弱くなっている。生態系全体を理解する、人間社会全体を理解する視点が必要で、この世界を等身大で見直す。そういういま、われわれが努力しているのは標本をもとにみんなで世界を理解するしくみの構築です。日本の大学博物館、世界の大学博物館を結ぶ情報ネットワーク、「知の宅配便」を構築する。

インターネットで送る「情報」ネットワークと、かみしめると味のでる標本を貸し借りする「もの」のネットワーク。あるいは、研究者や市民が世界各地から互いに訪問する世界をつくる。一〇年後くらいに、そのきっかけになる世界ができればしめたものかなと思っています。

河野 ●博物館は夢のある世界です。

大野 ●大英博物館の展示品は収蔵品の一パーセントというが、実質は〇・〇〇一パーセント以下。京大博物館でも、二五〇万点のうちの一〇〇〇点もあるかないかです。

河野 ●氷山の一角以下です。標本室を見ていただくと驚かされるはずです。資料がそれだけあるからこそ、自信をもって展示できる。この博物館はこれからますます繁栄するものだと、私は確信しています。

二〇一二年七月九日(月)
京都大学総合博物館にて



京都に生息する哺乳類の頭骨展示

巻頭対談 美しい自然と学問で若い世代を魅了したい

「もの」で「ところ」を伝える京都大学総合博物館

新石器時代の中国では穀物栽培やブタの飼育などの農業が定着し、紀元前16世紀に殷王朝が誕生した。岡村秀典教授が注目したのは、農耕社会の形成から古代都市への発展過程。甲骨文などの文字資料だけでなく、遺跡から出土した動物骨の種類と数を調べることで、古代王朝を支えた高度な経済システムを解明した。近年は、雲岡石窟やガンダーラ寺院址の収集資料をもとに、東アジア仏教文化とその源流に迫りつつある

人文科学研究所

中国文明とその源流を探る

——考古学からのアプローチ

岡村秀典
教授



中国山西省の北斉・徐顕秀墓(571年)にて

◎おかわら・ひでのり

1957年、奈良市に生まれる。文学博士。専門は中国考古学。1980年に京都大学文学部を卒業し、京都大学大学院文学研究科博士後期課程を中退して京都大学文学部助手に。九州大学文学部助教授、京都大学人文科学研究所助教授をへて、2005年より現職。著書の『三角縁神獣鏡の時代』(吉川弘文館)で、2000年に濱田青陵賞を受賞。

出土動物骨からみた中国文明の成立

私は関西に生まれ育ったので、「肉」といえば、牛肉を連想します。しかし、中国語で「肉」といえば、豚肉を指すのが普通です。中華料理の定番である回鍋肉や青椒肉絲などは、すべて豚肉を用いています。中国で「肉」が豚肉を指すようになったのは、ブタが肉用の家畜として最も多く飼われていたからです。

これに対して、西アジアではヒツジが主に飼われていました。ブタは雑食で、ヒツジは草食です。また、東アジアではイネや雑穀が栽培されたのに、西アジアでは粒のまま釜で炊いて食べますが、コムギは粉にしてパンや麺として食べるのが普通です。アジアの西と東では、古代から食生活がずいぶんとちがっています。中国文明はこのような農業を基礎に成立し、今日まで四〇〇〇年にわたって

維持されてきました。いまみたような食生活が、中国文明とどのような関係があるのか、私はそれを考古学の方法で探ろうとしています。

遺跡を発掘すると、人が食後のゴミとして棄てた動物骨がたくさん出土します。また、墓からは、死者への供物として捧げられた動物骨となって出土することがあります(資料1)。このような出土動物骨を鑑定することにより、新石器時代の農村ではブタを飼い、森でシカを狩猟していたことがわかりました。

森林に棲むイノシシが、人によって飼いに近い子を産み、成長も早いので肉用の家畜として最適です。ブタのエサは人の食糧と重なるため、家畜として飼うには相応の余剰が必要ですが、農業技術の進歩にともなってブタの畜産は中国農業の主要な副業として発達していきまし。なかでも便所と豚小屋が合体した「猪圈」は、人糞をブタのエサとして利

用するユニークな施設で、すでに漢代には広く普及していました(資料2)。

殷墟から出土した一万点を超える卜骨片

紀元前二六世紀、黄河中流域に殷王朝が成立します。

資料3は京都大学人文科学研究所(人文研)に所蔵する古いの骨(卜骨)で、そこに漢字の源流になった甲骨文字が刻まれています。司祭者である

殷王は、その裏側を火で焼き、骨のひび割れを占いみて政治をおこなっていました。従来は甲骨文字などの出土文字資料と伝世の古文獻を用いて殷周時代の研究が進められてきましたが、私は出土動物骨をみることで、王権と祭祀、学生社、二〇〇五年。



資料1 紀元前3千年紀の墓から出土したブタの頭骨
同じ墓地にはブタの下顎骨だけを埋めた墓もある。その鋭い牙で死者を悪霊から守ろうとしたのかもしれない



資料2 後漢墓から出土した「猪圈」模型
便所の下の囲いの中に1頭の雌ブタが寝そべっている。便所の屋根が豪華な瓦葺きであることから、有力者の屋敷に付設された便所を象ったものと考えられる



資料3 殷墟から出土した卜骨片
京都大学人文科学研究所にはこのような甲骨3,246片が所蔵され、最先端の甲骨文字研究がおこなわれている



資料4 ヒツジの群れと牧人(河南省)
トウモロコシ畑にある殷代の城郭遺跡を発掘しようとしたら、近くに住むイスラム教徒(回民)がヒツジの群れを連れてきた

たとえば、卜骨はウシの肩甲骨を用いていますが、殷の王都であった殷墟(河南省安陽市)から、これまでに二万点を超える数の牛骨片が出土しています。肩甲骨は二頭のウシから二つしか取れませんが、王朝の占いのために夥しい数のウシが犠牲にされたことは明らかです。また、甲骨文には、殷王がウシの飼養を直接管理し、祭祀で多数のウシを犠牲にしたことが記されています。実際に殷の都を発掘すると、出土する動物骨の半数以上がウシの骨で、次いでヒツジとブタの骨があり、シカなど野生動物の骨はごくわずかしかなかった。新石器時代や殷周時代の農村遺跡でブタとシカの骨が多く出土するのと対比すると、これは都市の際

多数の家畜を浪費できた 殷王朝の経済力

立った特徴とみることでできます。殷代より少しさかのぼった紀元前二千年紀に、西からヒツジが伝わり、ウシの家畜化が始まりました。ウシやヒツジは基本的に一年に二頭しか子を産まない単胎なので、肉として利用するには、ブタよりも生産性は劣っています。その代わり、ウシもヒツジも草食動物で、草原に放し飼いであれば、ブタのように飼料を与えする必要はありません。とくに、群れをなす性質があるた

め、ヒツジなら一人で二〇〇頭くらい管理できます(資料4)。

ブタの小規模な戸別経営が定着していた農村では、ウシやヒツジの牧畜はすぐには受け入れられませんでした。が、国家体制を整えつつあった殷王朝では、広い牧草地を確保してウシやヒツジの大規模な牧畜を始めたようです。その結果、祭祀や占いの犠牲、食用に大量のウシを用いることが可能になり、体の大きなウシを惜しげもなく浪費することによって、殷王ら支配者の威信が増大しました。食

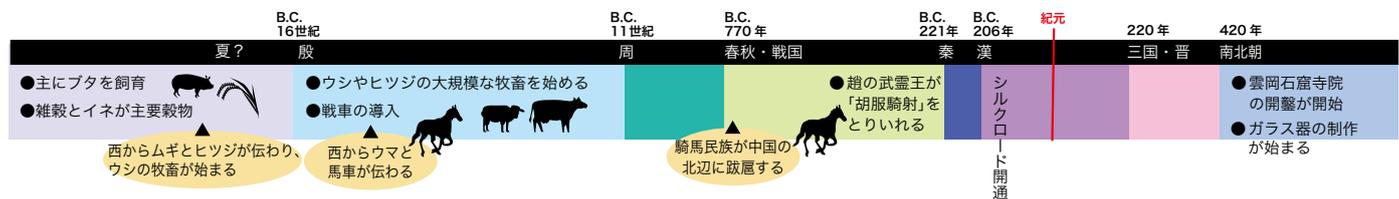
生活において、都市に比べて農家の格差が広がります。都市に住む貴族の間にも

大規模な牛馬の牧畜で遠征が可能に

身分による格差が生まれていきました。周代の儀礼制度を記した『周礼』や『礼記』には、王や諸侯はウシ・ヒツジ・ブタを用い、中位の貴族はヒツジとブタ、下位の貴族はブタだけを用いる、と書かれています。遺跡や墓から出土した動物骨を分析することによって、そのような身分規定が実際にあったことがわかった。検証することも考古学の重要な研究だと考えています。

殷代にはまた、西からウマと馬車が始まりました。ウマの牽く戦車の導入によって、それまでの歩兵による戦争が一変しました。歩兵だけでなく、持ち運びできる兵器に限りがあり、遠くまで戦争に出かけることが難しかったのですが、戦車を備え

本稿でとりあげた主な王朝と出来ごと



た機動部隊にウシの牽く荷車で兵糧を運ぶようになると、遠くの異民族に対しても征服戦争を仕掛けることができるようになりまし。殷墟の甲骨文には「羌」などの遊牧民との戦争がしばしば占われ、西周時代の「小孟鼎」という青銅器には、遊牧民の俘虜二万三〇八一人、車二〇輛、ウシ三五五頭、ヒツジ三八頭を捕獲したことが銘文に記されています。西周王朝は数万人規模の軍隊を派遣したようです。「国の大事は祭祀と戦争にあり」とは中国古代の格言ですが、家畜の変化に着目してみると、殷代が国家形成の大きな転換期であったことがわかります。

仏教の東伝とシルクロードの考古学

紀元前二千年紀に下ると、中央アジアではウマの利用が馬車から騎馬へと転換し、いわゆる騎馬民族が中国の北辺にも跋扈するようになりました。これに対抗するため、中国では前四世紀末に趙の武靈王が「胡服騎射」を取り入れ、前二世紀末には漢の武帝が北に匈奴を攻撃し、西にシルクロードを開通しました。しかし、紀元後四世紀初めに晋王朝の内乱が呼び水となって遊牧民が大挙して南下し、次々と軍事政権を打ち立てていきました。

に雲岡石窟の開鑿が始まりました。これは中国で最初に造営された巨大な仏教寺院で、東西一キロメートルにわたって大小四〇あまりの石窟が並んでいます(資料5)。石窟の前に立つと、硬い岩を鑿で少しずつ彫りだしていったエネルギーの大きさに、誰しもが圧倒されます。

七〇年以上にわたる人文研の海外学術調査

一九三八年から四四年までの七年間、人文研はこの雲岡石窟を詳しく調査し、戦後に一六卷三冊という大部の報告書を刊行しました。戦後の日本が国際社会に復帰したサンフランシスコ講和会議のとき、吉田茂首相が完成間もないその報告書を持参し、戦中・戦後のきびしい状況下において推進された日本の高度な学術研究を世界にアピールしたというエピソードは、いまでも語り継がれています。

人文研所蔵の貴重な発掘資料にふたたび光を

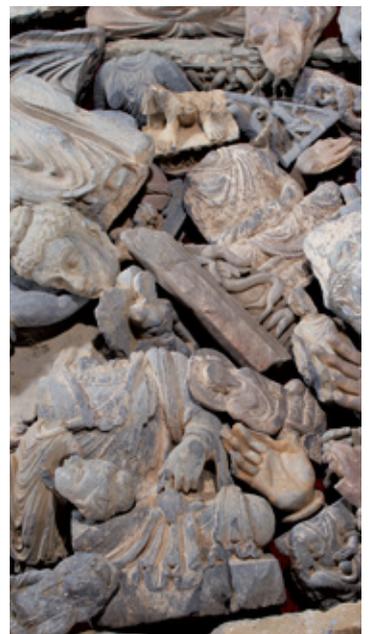
きた考古学的調査のねらいは、僧侶や在家の人びとが祈りを捧げた仏教寺院の全体像を明らかにし、仏教東伝の実相を多角的に研究するところにあります。



資料5 雲岡石窟の第20洞
460年に曇曜が開いた五大石窟のひとつで、仏像の高さは約14m。雲岡石窟はユネスコの世界文化遺産にも登録され、高校世界史の教科書にはかならずといってよいほど、この露天大仏の写真が掲載されている

そのひとつ鮮卑族の北魏が五世紀前半に北中国を統一すると、シルクロードを経てインドや西アジアとの交通が活発になりました。漢代までの中国人は、自分たちの文明こそが世界の頂点にあると自慢していたのですが、戦乱が続いて疲弊する中、まったく異質で高度なインド文明に接し、たいへん驚いたようです。仏教に帰依する人が続出し、北魏の都の平城(山西省大同市)では、文成帝の命により四六〇年

再開を望む声が高まり、一九五九年には「京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊が組織され、雲岡石窟にいたる仏教文化の源流を探るため、ガンダーラ寺院址の発掘が始まりました。いまのパキスタン西部を中心とするガンダーラ地方は、東洋と西洋の文明が交わり、紀元後まもなくこの地で東西の文化が融合して仏教が誕生し、仏教信仰の拡大とともに、広くアジア各地に伝わりました。また、雲岡石窟に代表される中国の仏像様式は、日本の飛鳥様式の源流としても知られています。このような仏像研究の重要性もさることながら、七〇年以上にわたって継続されて



資料6 ガンダーラ寺院址で発掘した石仏片
京都大学人文科学研究所にはガンダーラ寺院址で発掘した仏像600点ほどが所蔵されている。そのすべてが、出土位置を記録した貴重な学術資料である

人文研には中国石窟やガンダーラ寺院址の調査で収集してきた考古資料が多数保管されており、ここ十数年来、私は仲間を募ってその整理と共同研究を始めています。雲岡石窟については調査当時の写真が二万枚以上あり、雲岡石窟を含めた調査の映画フィルム四本はすでに京都大学デジタルアーカイブで公開されています。また、石窟の周辺から出土した瓦を数埋し、石窟前には瓦葺きの木造建物、石窟の上には僧侶が生活する僧房があり、瓦の文様変化からそれらの造営順序を明らかにすることができました(雲岡石窟遺物篇 朋友書店 二〇〇六年)。

ガンダーラ寺院址で発掘され、パキスタン考古局との協定により人文研に持ち帰った考古資料には、仏像などの石彫やストゥツコ(漆喰の塑像)、土器などがあります(資料6)。ガンダーラの仏像は美

面の奥に秘めた闘志

●剣道部

◎主務・佐々木智史さん(文学部4回生)



5 月半ばの夕刻、待ち合わせ場所に現れたのは、色白の寡黙な青年。締まった二の腕に目せとまる。

剣道部の代替わりは11月。主務に選ばれた佐々木智史さんは、長らく続けた居酒屋のバイトを12月で辞めたという。「就職活動も忙しくて」とつけ加えたが、創部110年の歴史の重みと、41人を率いる主務としての責任感がそうさせたのかもしれない。

剣道との出会いは小学校4年。「ぼくはすっかり忘れていたのですが、『剣道を習いたい』と両親に頼んだようです。竹刀を振るのが楽しかった。中学、高校も剣道部。「もう生活の一部ですね。卒業しても続けるつもりです」。故郷に貢献したいと、広島県で就職活動中。

京都大学体育会の部活の多くは、学生主体で運営している。年間の活動計画や遠征などの費用の確保、剣道連盟や他大学との交渉など、主務はなにかと忙しい。学業優先はいわずもがな。「限られた時間を無駄にしないよう、メリハリをだいにしています」。「やるときはやる」が佐々木さんの座右の銘。

「自分たちの弱点を分析して、練習内容を工夫します。すべては自分たちの意識次第。そこにやりがいを感じます。有力選手が集まっている私学の強豪を破ったときは、とくにうれしいです」。

めざすのは10月の「全日本学生

→「段位の高い方がかならずしも勝るわけではないのが、剣道のおもしろいところですよ」という佐々木さんは四段(左)

剣道優勝大会」。5月の個人予選では男子2人が出場権を獲得した。9月には団体予選が控えている。「今年はけっこう、いいところまでいけそうです」とニヤリ。

練習開始は午後7時。佐々木さんにいざなわれ体育館地下の武道場に。「素振りはじめ!」の号令で、叫びにも似た甲高い声が響きわたり、武道場は熱気を帯びる。胴や面などの防具をつけての本格的な稽古が始まると、緊張感はさらに高まる。面に隠れて表情は見えないが、きびきびした動きには闘志が満ちている。

途中、足を痛めたらしい部員が一人、道場を離れ廊下に出てきた。外した面の下には、汗だくの佐々木さん。手早くアイシングするその表情は、インタビュー中とはまるで別人だった。

*剣道部ホームページ
<http://kyodaikendo.web.fc2.com/>



←部員の8割は男性。雑巾がけから始まる練習は私語厳禁



新入生たちの活躍

邁進・京大スピリット

観客をまきこんで「不思議」を楽しむ

●京都大学奇術研究会

◎会長・西田明弘さん(工学部3回生)



↑「手品を始めてよかったと、部員みんなに思っしてほしい」と、会長の西田さん

「得意」のマジックを見せてほしい」とねだってみた。ふわふわと浮遊する銀の玉、交差するたびにつなぎ、増える銀の輪。いずれも「これぞ手品」という古典的なネタだが、目の前の「不思議」に釘づけになる。「マジックの難易度よりも、お客さんにウケるかどうかが大切なんです」と会長の西田明弘さん。話しながらも、手は無意識にトランプをシャッフル。

彼の特技は「シンプル」というステージ・マジック。手を開いたり閉じたりするたびに、指先のキャップが消えたり、増えたり、赤・青・黄色と変化する。なめらかな手さばきだけでなく、くるくる変わる西田さんの表情にも引き込まれる。言葉はいっさい発しないが、口を開けて大げさに驚いたり、肩をすくめておどけたりするたびに、こちらもつられて体が動き、声が出る。「お客さんとの距離が近いことが、ぼくたちの手品の魅力です。手品はマジシャンの独壇場というイメージがありますが、表情だけで会話できるようにすれば、客席との一体感が生まれます」。

練習の成果を披露する場はさまざまで、地域の子ども会や老

←腕や布巾吸いつくように動く「ピンボール」。彼のかもだすミステリアスな雰囲気も魅力的



人会のイベント、歓送迎会の余興などに声がかかる。一大イベントは、京都大学の11月祭にあわせて開催するマジック公演「Magic Castle」。ハリウッドの奇術専門の会員制クラブにあやかり名づけたこのイベントは、全部員が参加して、テーブル・マジックとステージ・マジックをたっぷり披露する。「教室いっぱいのお客さんには緊張しますが、驚いてもらえる」と快感です。

新入生たちは、教わって間もないトランプ・マジックに挑戦。机に伏せたカードから思わせぶりに1枚抜き出し、「あなたが選んだカードはこれですね」としたり顔。でもよく見ると、その手は震えている。初々しい後輩たちに先輩たちは、「シャッフルしたカードはこうやって戻すのがコツ」と見本をみせてアドバイス。マジックは部員どうしの距離も縮める。



1人で練習するよりも、人前で披露することで上達が早まるという

*奇術研究会ホームページ
http://www.geocities.jp/kuma_magic/

雨降っても、地固まれ！ 京大発！土のうをつかった 「道直し」の旅

みちぶしんびと
●NPO法人道普請人が主催する
スタディ・ツアーに参加
◎宮崎祐輔さん(工学部3回生)



「住民たちの手でいつでも補修できるのも、土のう工法のメリットです」と熱弁する宮崎さん



↑敷き詰めた土のうを土で覆えば、雨に強い道路の完成
◀村びととともに20数名で土のうを並べ、人力で締め固める。中央奥が宮崎さん



も めごとがかえって良い結果をもたらすことを「雨降って地固まる」とたとえるが、世界を見わたせばそう楽観できない。インフラ整備が不十分な開発途上国では「雨降って地面がゆるみ」、生活が困窮することもしばしばだ。

東南アジアや東アフリカの農村に赴き、現地住民とともに道路を補修するスタディ・ツアーに宮崎祐輔さんが参加したのは2011年、2回生の秋のこと。目的地は1万キロメートル離れた赤道直下の国、ケニア。「夜遅くまでアルバイトをして渡航費を貯めました」。

百聞一見、ホームステイ先の村に向かう途中で、その悪路に驚いた。「深い轍で車が大きく揺れるたび、体が浮いて天井に頭を打ちつけそうでした」。農村部の未舗装道路は、雨のたびに水がたまって泥道になる。「市場とのルートは断絶され、現金収入の糧となる農産物の出荷がとどこおるのです」。

救世主は「土のう」。宮崎さんを含む参加学生3名と現地スタッフは20数名の現地住民と力をあわせて泥道を整備し、轍に土のうを隙間なく敷き詰めた。袋に土砂を詰めるだけの土のうは、日本では土木工事や水害時の応急対応などに重宝される。

必要なのは袋代と人力くらいで、高度な土木技術はいらない。このローコスト・ローテクの土のうによる人力での「道直し」を海外に普及させ、スタディ・ツアーを企画したのは、京都大学大学院工学研究科の木村亮教授がたちあげたNPO法人「道普請人」。道直しの支援を通じて、現地住民が自らの力で問題を解決できるようにすることが目的だ。

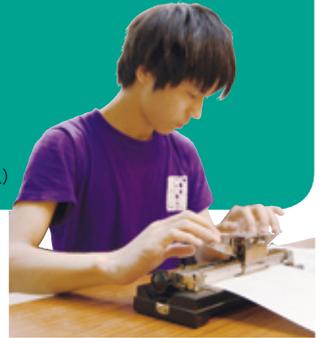
2日かかって、30メートルほどの農道を改修した。「雨に強い道に生まれ変わりました。この方法なら、農村を市場とつなげることができる」。現地の人たちから、「ドノウテクノロジー・イズ・グッド」と歓声があがった。

学生時代は経験を貯える時期と決めた宮崎さんは、休暇のたびにリュックと好奇心を携えて海外へ。「おもしろいと思ったことは、なんでもやってみよう。3回生の夏はシルクロード横断に挑みます。国際協力をするなら、なにかの専門家にならんとあかんけど、そのまえにいろいろな国の人と出会い、多様な価値観にふれたい」。「地は固めても価値観は固めない」のが宮崎流だ。

★道普請人ホームページ
<http://michibushinbito.ecnet.jp/>

「仕事」に励む青春もある

●2011年度厚生労働大臣賞、
2011年度京都大学総長賞受賞
●点訳サークル
◎代表・橋本雄馬さん(理学部3回生)



ときどき打ちこんだ点字をのぞきこみ、正確かどうかを確認

ガチャン、ガチャン。部室に響くのは、点字用タイプライターの音。男女7人が黙々と作業を続けている。部室というより、まるで仕事場。「話しかけられて目を離すと、どこまで打ったかわからなくなるので、作業中はおのずとみんな無口です」と代表の橋本雄馬さん。視覚障害の方からの依頼を受けて無償で点訳する。人気マンガから難解な医学書までジャンルは幅広い。1冊のマンガ本を点訳するのに数か月。「学祭のパンフレットくらいなら2日で仕上げます。ぼくには無理ですが、楽譜や数式も点字で表現できるんですよ」。

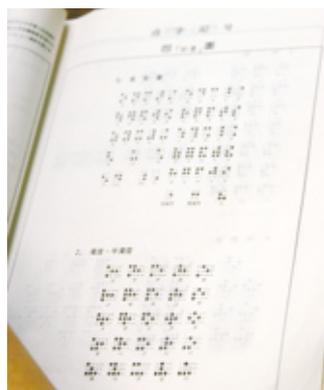
部員数はわずか7人。「サークルの母体は40年前にできましたが、15年ほど前に手話と点訳とに分かれました。『点字』はまだまだマイナーで、『展示』と誤解されることもあるんです」と苦笑い。毎年2月に開催される「学生点訳競技大会」では、近畿圏の大学の点訳サークルが参加して、速さや正確さを競うという。「正確さはたいせつ

ですが、点訳はそもそも競うものではありません。ぼくたちの目標は、依頼者の期待にきちんと応えること」と戒める。

点字には漢字のような表意文字はなく、すべては表音文字。点字にただ置き換えればよいというわけでもない。「視覚障害者にとって読みやすい点訳になっているかどうかがだいじです。自己満足に終わらないように心がけています」。

長年のボランティア活動が評価され、2012年2月に厚生労働大臣賞を受賞。「古い名簿をひっぱりだして、OBのみなさんに報告しました。その功績を認められ、京都大学総長賞も受賞した。でも、とうの部員たちには浮かれたようすもなく、淡々と目の前の仕事をこなす日々」。

ボランティア活動に関心があった橋本さんは、大学から点訳をはじめ、民間のサークルで手話も学んだ。夢は理科の教師。「教育心理もたいせつですが、まずは理学をきちんと学んで、学問のおもしろさを子どもたちに伝えたい」。視覚障害者の教育支援のあり方は、「まだまだ工夫できるはず」と、点訳サークルでの活動をつうじて得た実感を未来に活かそうと意気込む。



★点訳サークルホームページ
<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/1029/>

↑基本の「五十音」はわりとすぐに覚えられるそうだが、文章を打つときの細かいルールをマスターするには時間がかかるという

→「厚生労働大臣賞」の賞状を囲んで。寝耳に水のニュースでしたと橋本さん(左)



発言者

- 大山修一 准教授
- 田中利和さん (リサーチ・アシスタント)
- 庄司 航さん (研修員)
- 浅田静香さん (院生)
- 丹羽爾朗さん (院生)
- 野口真理子さん (院生)
- 藤田知弘さん (院生)
- 山本雄大さん (院生)
- 石黒 翔さん (学生)
- 元木 航さん (学生)

◎ 上げた・まさよし

1956年、京都市に生まれる。専門は人類学。ナイロビ大学農学部作物学科留学後、京都大学大学院農学研究科に、JICA専門家としてアディスアベバ大学博物館勤務などをへて現職。1978年以来、スーダン、ケニア、エチオピアなどアフリカ各国の在来農業がかかえる諸問題を、農業科学、人類学、生態学、栽培植物起源学、民族植物学など、ヒトと植物との関係論の視点から多角的にとらえる。幼少期にくり返し読んだ愛読書は、「ドリトル先生 アフリカゆき」。NPO法人「アジアとアフリカをつなぐ会」代表。

授業に潜入! 「おもしろ学問」 講義録

全学共通科目ポケット・ゼミA群 (人文科学・社会科学系科目)
「アフリカの人と植物の関わりを考える」

アフリカを 食べよう



重田 ● きょうのテーマは「アフリカを食べよう」。先輩の院生たちが、この授業のために数日前からメニューと材料を準備してくれています。一二のメニューのうち、ぼくも知らない料理が一つあるようです。

受講生 ● 先生、メニュー表に「イモムシ」とありますが……。
重田 ● 日本や東南アジアでも昆虫食は古くから知られています。栄養価の高いイモムシは、アフリカでもとくに南部で貴重な食材としてよく食べられます。マメ科の樹木につく蛾の幼虫で、乾季の終わりから雨季の初めに大量発生します。幹につばいについたイモムシを、現地の人たちはよこんで採ります。苦い内臓部分をとり、のぞいて天日干しにした「乾燥イモムシ」は、現地のマーカーでも売られています。揚げたり、ゆっくり煮戻して味付けします。きょうは塩味にしました。せっかくだから一口くらいは食べてみて。(笑)

食べるだけ じゃなくて、調理を 手伝ってもらいますよ

重田 ● 見るからに辛そうじゃないやなくて、調理を留学生のサミュエルさんがかまわしていますね。ドロワットというエチオピアの料理です。これからゆで卵を加えてすこし煮込むと完成です。インジェラと一緒に食

重田眞義

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

重田教授の関心のひとつにエチオピアの主要作物、エンセーテがある。茎が含む澱粉質を発酵させて、蒸したり、焼いたり、煮込んだりと調理方法は多種多様。葉は家畜のエサや建材などに余すところなく利用できる。重田教授のポケゼミは、このエンセーテをキーワードにアフリカの伝統的な暮らしと植物との関わりを学ぶ。ポケゼミは1回生限定だが、「若いうちに視野を拡げてほしい」と、重田教授は大学院生たちとともに学ぶ合同授業を企画。廊下に漂う香辛料の香りに、学生たちはそわそわはじめた。「さあ、現場に行きましょう」。重田教授の号令で、「知のフィールドワーク」がはじまった

受講を前に

「アフリカの人と植物の関わりを考える」はアフリカ地域研究資料センター(通称アフリカセンター)の担当、「アフリカの自然保護を考える」と「アフリカ地域研究ゼミナール」は、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)の担当。「アフリカセンター」は1986年の発足で、ASAFASはその12年後に誕生。アフリカの多様性を伝えたいと、合同授業に積極的な重田教授。「最初のころのポケゼミでは、授業時間外に、生きた鶏

をさばく実習をしたりしました。当時の学生はほかの講義や課外活動を休んででも参加したのですが、近ごろはまじめというか……。ちょっとさみしいですね。

ポケゼミの学生たちのアフリカ関心度も知識もさまざま。興味半分の子たちもいて「当初は戸惑いもありましたが、10年続けたいまは、アフリカのことをきちんと伝えられるか、教員の力量が試されているという点でも意義を感じています」。

*1 テフ(Eragrostis tef)

イネ科。エチオピアや高原地帯でひろく栽培され、おもにインジェラの材料として利用される。小麦とちがってグルテンを含まないうえに栄養分も豊富。小麦アレルギーの人も食べられるので、近年は欧米でも注目されている。「テフ」の語源は、種子は床に落とせば見失ってしまうほど小さいことから、アムハラ語で「消える」、「なくなる」という意味の「タッファ」に由来するともいわれる。



●「ポケット・ゼミ」ってなに？

学部の新入生の希望者を対象に、原則として10人で1つの少人数単位で、各学部や研究科、研究所、センター等の教員がフェイス・トゥ・フェイスの親密な人間関係のなかで、さまざまな形態でおこなう授業。大学での勉学の視野を拡げ、人間や社会、自然について深く考える力を養成することを目的に1998年度に設置。授業内容は、歴史、地理、古典の講読や環境、資源、宇宙、医学等の最先端知見の紹介、野外実習など、総合大学ならではの豊富さが特徴。通称「ポケゼミ」。

三つの科目の合同授業として開催

- ポケット・ゼミ
「アフリカの人と植物の関わりを考える」
(重田眞義教授)
- ポケット・ゼミ
「アフリカの自然保護を考える」
(山越言准教授)
- 全学共通科目
「アフリカ地域研究ゼミナール」
(高田明准教授、大山修一准教授ほか)

1 授業で紹介されたアフリカ料理



重田教授お気に入りの木皿



インジェラは外側から流し込んで焼くのがコツ



ドロワット担当のサミュエルさんはエチオピアからの留学生

2 伝統的なインジェラ焼き器のしくみ



- *4 エンセーテ (*Ensete ventricosum*)
バショウ科。バナナによく似た外観だが、果実は食べず、多量の澱粉が含まれる茎と根茎を食用とする。根茎の澱粉をかきだして地中に埋めて発酵させ、調理して食べる。葉や茎は家畜の飼料に、茎からは繊維をとって袋やロープに加工できる。ほとんど捨てるところがない植物だが、エチオピアでしか栽培されていない。重田教授の研究室にはエンセーテ製の雑貨が並ぶ。
- *2 モロコシ (*Sorghum bicolor*)
イネ科。ソルガムともいう。食用のほか、飼料や燃料、アルコール原料にもなる。熱帯アフリカ原産で、スーダンやエチオピアでは紀元前3000年ころから栽培されていた。日本には15世紀ころに中国経由で伝来。
- *3 キャッサバ (*Manihot esculenta*)
トウダイグサ科。乾燥に強い熱帯低木。南米に起源したとされる。根(いも)は蒸したりゆでたりして食べるが、毒抜きが必要な品種もある。17世紀の奴隷貿易をきっかけにアフリカに伝わった。

重田 ● これを目というのなら、インジェラの縁は耳っていうんじゃないかと、エチオピアへ行くたびにいろんな人に尋ねているのですが、残念なことに言わないらしい。(笑)

根や茎種子や果実から採れる澱粉を発酵させてつくる料理が多いんです

田中 ● フィールドワークでは、現地の人と同じものを食べるのが基本です。とても酸っぱいインジェラは、その味がやみつきになる人もいれば、その逆の人もいます。ほくは、これを食べないことにはアフリカにきた実感はわかない。(笑)

重田 ● 意外かもしれませんが、アフリカにはインジェラのように植物の根や茎、種子や果実などから採れる澱粉を発酵させてつくる料理が多いんです。スーダンには、インジェラとよ

く似たキスラという主食があります。材料はモロコシで、最近独立した南スーダンでも日常的に食べられています。中央アフリカのコンゴには、キャッサバの根(いも)の澱粉でつくる「ちまき」のような料理があります。これは練った粉を竹の皮ではなくて、バナナの葉に包んで発酵させます。インジェラよりも酸っぱくて、エンセーテの発酵澱粉の味に近いので、なにか共通点がありそうですね。

ナイジェリアには、おなじくキャッサバの澱粉を発酵させたガリがあります。いちど粉にしてから水分を加えて加熱して、粒状にします。クスクスと同じ調理方法ですね。

きょうはホット・プレートで焼きますが、エチオピアの家庭では、焙烙皿のような大きくて平らな土器を熱して、その上で焼きます。近年は「電気式インジェラ焼き器」が登場しました。伝統的なインジェラ焼き器は、地面に設けた電で焼くので、調理のたびに腰をかかめないといけない。その点電気式はテーブルほどの高さですから、ずいぶん楽です。田



舎でも電気のできている地域では普及しはじめています。

焼きあがったインジェラは、大きな皿に盛りつけます。これはエチオピアから持ち帰ったインジェラ専用の木製の皿で、地元の人の手づくりです。日本とエチオピアでは湿度が異なるので、すこし反ってしまいました。幾何学模様は、エチオピア正教の十字架がモチーフです。熱した金属の棒を焼きつけて描いてあるので、使い込んで色落ちしません。

使われているのはおそろくコルディア・アフリカーナという木です。エチオピアの西南部高地に多くみられる樹種です。最近では金属製の皿が売られるようになってきましたが、今でも大小の木皿が日常的に作られています。一二年前初めてエチオピアに行ったとき、この木皿にひとめぼれしました。

現地の人たちが使う 素朴な日用品になぜか 惹かれるんです

素材はヤシの葉。ヤシには何百種もあって、アブラヤシやココヤシは日本人にもなじみがありますが、これは日本では「シュロヤシ」とよばれる種類で、箒やたわしに使われます。

シュロヤシの葉は長さ約1メートル。細く裂いて乾燥させて、まずは三つ編みの要領で紐状に長く編んで、中心からうず巻き状に巻きつけながら編みあげます。縁には、化学染料で染めた葉を好みの配色で編み込んであります。巻がずに帯状に仕上げれば「ゴザ」になります。ほくの研究室に敷いてありますよ。

料理の盛りつけ方はいろいろですが、きょうのはまた、ずいぶんモダンですね。(笑) エチオピアの一般家庭で食べるインジェラのサイズはもっと大きいですね。何枚も重ねた真ん中におかずを盛ってから、周囲からちぎったインジェラにおかずを包むようにして食べます。

受講生 ●おなじヤシ科のフェニックスの実を食べないのですが、母校の高校の校庭にあったフェニックスは、春にはオレンジ色に熟した実がたくさん落ちて、すこしいいにおいでした。しかし、食べる勇氣はなくて……。

重田 ●勇氣がなくてよかったですね、そのまま食べると毒ですよ。(笑) 果実や根に含まれる澱粉には、毒性のあるものがあります。そういうものは、水に晒すか発酵させて食べます。じつはキャッサバにも毒はあって、両方の方法を利用します。加熱する方法もありますが、熱では消えない毒もあります。フェニックスはエチオピアにもたくさん生えていて、葉は編物の材料としてマーケットで高く売れますが、実は食べないなあ。ほくの先輩は、友人からもらった菊の花があまりにもおいしそうだから、花をむしって食べたたら、めまいと頭痛と吐き気

でひっくり返ったそうです。刺身の「つま菊」のように食べられると思ったんですね。花を食べる食文化は東アジア特有で、アフリカにはまったくないといっていますね。

山形県や青森県など、東北地方の一部では菊の花を天ぷらやお浸しにして食べる習慣があります。「阿房宮」や「延命菜」などの品種が食用菊として知られています。関西でもたまに売っています。でも、鑑賞用の菊には、花を長もちさせる薬品が使われていることがあって、人体に有毒なこともあります。好奇心にまかせて、なんにでも挑戦してはいけないという話です。(笑)

ほくもきょう初めて食べる 「ロレックス」って、 いったいどんな料理?

重田 ●さあ、エチオピアの料理のドロワットとインジェラができたあがったようです。つくった方、説明してもらえますか。

野口 ●ドロワットのドロはアムハラ語で「鶏」、ワットはインジェラに添える副食の総称です。鶏肉とゆで卵の入ったとても辛いシチューです。インジェラを右手の指でちぎって、ワットを包んで食べます。

重田 ●イスラム圏やインドでは、左手は「不浄の手」とされ、食事のときには使いません。エチオピアにも同様の習慣があるようです。一口で食べて、かじりかけを手に残さないのがマナー。指をなめてもらいます。エチオピアで鶏の料理は、お客さんを迎えるときやお祝いごとなど、ハレの日の特別な料理です。ふだんは、豆のワットです。

大山 ●これはナツメヤシの実。サハラ砂漠に暮らす人たちは乾燥させたものを食べますが、きょうのは食べやすいように湯通しして柔らかくしてあります。甘いので辛い料理のあとのお口直しにどうぞ。種は大きすぎるので、飲み込まないように。

丹羽 ●これはウガンダの軽食で、ロレックス。

重田 ●ほくは、きょうはじめて知りました。ロレックス時計ではありません。(笑)

丹羽 ●「ロール・エッグス巻き卵」とかけているんでしょう。(笑) クレープのような皮の部分は、ウガンダでよく食べるチャパティです。刻んだトマトやキャベツ、タマネギを混ぜた卵を焼いてチャパティで巻いて食べる。ウガンダではソースはあまりつけませんが、きょうはお好みでどうぞ。

重田 ●チャパティは、小麦粉を水で溶いて鉄板で薄く焼いたもので、インジェラのように発酵はさせていません。インドではカレーと一緒に食べますね。



インジェラの盛りつけあれこれ



インジェラをきれいに巻いて並べるのは、ここ数年の習慣です。エチオピアの高級ホテルでのパーティで、インジェラを初めて見た外国の方は「おしぼり」と間違えた。(笑) 大皿に重ねて盛りつけて、みんなが四方八方から手をのばして食べるのが、ほんらいのアフリカ式の食事のスタイルなのですが、西洋化の影響でしょうか、食事もだんだんと個人化していますね。



アフリカにインターンシップに出かけませんか

重田教授のポケゼミ受講をきっかけに、夏休み休暇を利用して、エチオピアでの調査活動のインターンシップに参加した学生がいる。2012年春に京都で開催された国内学会「日本ナイル・エチオピア学会」でその成果を発表した元木さんと石黒さんは、「後輩たちにもぜひ経験してほしい」と目を輝かせる。

*

元木 ● 昨年の夏休みの1か月、調査研究補助としてエチオピアに同行しました。午前中は重田先生と行動をともにし、エンセーテを収穫して解体し、サイズや成分の調査などを手伝って、あとは夜まで自由行動。村の人たちとしゃべったり、子どもたちと遊んだり……。フィールドノートを携帯し、子どもたちに教えてもらった単語や、気づいたことをこまめに記録しました。日本語とニュアンスが似ている表現もあるんです。「暑い」は「アツアツ」。寒いのは「カジカジ」。(笑)

石黒 ● 現地の人とともに寝起きたからこそ、彼らのふだんの生活を知ることができました。帰国してから読んだ本に、現地で実践したフィールドワークの手法が紹介されていて、「あっ、俺もこうだった」と共感できて、うれしかった。(笑)

元木 ● 朝食は市場で買ったパンとジャム。昼食は村の人につくってもらうインジェラ。夕食はぼくたち学部生の担当で、現地の野菜と日本から持参した食材とを組み合わせて、カレーやパスタをふるまいました。「これも食べて」と、みなさんいろいろ持ち寄ってくれるから、食べ過ぎて腹の調子が悪かった。(笑)

首都には物乞いがたくさんいました。「困っている人は助けなあかん」と思っていたはずなのに、いざ対面すると、どうすべきかためらいました。現地の人は躊躇なく施しをする。カルチュア・ショックでしたね。

現地に行くなら、なにがしたいのかを事前にしっかり計画しておくことをおすすめします。自由時間を有意義に過ごせますよ。



重田 ● トウモロコシの粉をお湯で溶いたあとと大量の粉を加えて

料理です。

主食と一緒に食べます。これもクリスマスなど、ハレの日の料理です。

アフリカ研究の

ゼミなんだから、箸は使わず、

手で食べようよ!

藤田 ● マラウイでよく

食べられるチキン・シ

チューは、ウガリなどの

主食と一緒に食べます。これもクリスマスなど、ハレの日の料理です。

西アフリカにもクスクスとよばれる料理がありますが、そこらはヤムイモやキャッサバの澱粉を練って丸く餅状にしたもので、フフともいいます。

重田 ● 料理名はクスクスですが、材料の粒もクスクスといいますが、元の粒は半透明です。材料は小麦ですが、パンをつくる小麦ではなく、パスタなどに使うデュラム小麦*です。食べればわかりますが、小麦を粉にしてから粒状に成形しているところがクスクスのミンです。モロコシなどの材料でもつくります。

重田 ● 最後はサモサ。きょうは春巻きの皮を使いました。スパイスで味つけた挽肉やタマネギ入りです。サモサはケニアやタンザニアの街角やマーケットで売っています。ベジタリアンが多いので、植物油で揚げた豆だけのサモサもあります。もとはインドの料理で、サムサという場合もありますね。

さあみなさん、いただきますよ。でも、お箸は使わないように。アフリカの人たちは、基本的に手で食べます。これはアフリカ研究のゼミなんだから、手で食べましょう。ビールグラス、じゃなくて麦茶の紙コップはゆきわたりました。料理の準備をしてくれた院生のみなさん、お疲れさま。これからのポケゼミもつまききましますように。そして、みなさんの学部生活がもっと楽しくなりますように、声をあわせて「乾杯！」

浅田 ● ショロフライスは西アフリカやガーナのポピュラーな料理です。トマトやタマネギ、ショウウガ、お肉の入ったパエリアのようなものです。

庄司 ● サツマイモをマッシュ状につぶして、ごまをまぶして揚げたのがスイーツ・ボール。これはタンザニアでよく食べられています。

練ったウガリは、東アフリカから南アフリカまで、広い地域で食べられているポピュラーな主食です。ザンビアやマラウイなど南部アフリカでは、シマといえます。イネ科の雑穀のトウジンビエ*でつくるウガリがいちばんおいしいと、ぼくは思うのですが……。

ケニアのムカデ・ヤ・マヤイを知っていますか。ムカデはスワヒリ語でパン、マヤイは卵。ロール・エッグスではなく、フレッド・アンド・エッグという意味で、巻いてはいませんが、つくり方はおなじ。小さめのチャパティを焼いて、その上に卵を割る。お好み焼きのようにひっくり返してまた焼いて、ケチャップをかけて食べる。とてもおいしい屋台料理です。

田中 ● これは東アフリカでよく飲まれるチャイです。シナモン・ステイックを紅茶で煮だして、牛乳を入れてさらに煮ます。こちらはモロッコ料理のクスクスで、きょうは砕いたアーモンドと干ブドウ、キュウリやニンジンなどをまぜて、サラタ風にアレンジしました。

アフリカ研究の

ゼミなんだから、箸は使わず、

手で食べようよ!

藤田 ● マラウイでよく

食べられるチキン・シ

チューは、ウガリなどの

主食と一緒に食べます。これもクリスマスなど、ハレの日の料理です。

西アフリカにもクスクスとよばれる料理がありますが、そこらはヤムイモやキャッサバの澱粉を練って丸く餅状にしたもので、フフともいいます。

重田 ● 料理名はクスクスですが、材料の粒もクスクスといいますが、元の粒は半透明です。材料は小麦ですが、パンをつくる小麦ではなく、パスタなどに使うデュラム小麦*です。食べればわかりますが、小麦を粉にしてから粒状に成形しているところがクスクスのミンです。モロコシなどの材料でもつくります。

重田 ● 最後はサモサ。きょうは春巻きの皮を使いました。スパイスで味つけた挽肉やタマネギ入りです。サモサはケニアやタンザニアの街角やマーケットで売っています。ベジタリアンが多いので、植物油で揚げた豆だけのサモサもあります。もとはインドの料理で、サムサという場合もありますね。

さあみなさん、いただきますよ。でも、お箸は使わないように。アフリカの人たちは、基本的に手で食べます。これはアフリカ研究のゼミなんだから、手で食べましょう。ビールグラス、じゃなくて麦茶の紙コップはゆきわたりました。料理の準備をしてくれた院生のみなさん、お疲れさま。これからのポケゼミもつまききましますように。そして、みなさんの学部生活がもっと楽しくなりますように、声をあわせて「乾杯！」

*7 デュラム小麦

パン小麦よりもたんぱく質の含有量が多く、粒が硬いうえに発酵しにくい特性をいかしてパスタやマカロニに利用される。乾燥、高温気候に適し、地中海沿岸や北アフリカ、中央アジア、アメリカ大陸などで栽培される。アフリカではクスクスの材料として重宝される。

*8 トウジンビエ(*Pennisetum glaucum*)

イネ科。スーダン地帯に起源し、アフリカの乾燥地帯やアジアに伝播したとされる。現在はアフリカ、南アジアで多く栽培される。製粉してパンやクスクスに加工したり、粥として食べるほか、飼料、酒の原料としても利用される。

*5 エチオピア正教

エチオピアで信仰されているキリスト教の一派。教義を巡る対立から、5世紀に主流派から分離し、ヨーロッパのキリスト教とは異なる独特の宗教文化を発展させた。精巧かつ様式化された、ヨーロッパのキリスト教とは異なる形状のエチオピア十字もその一つである。

*6 クスクス

モロッコでは、蒸したクスクスに、肉や野菜のスープをかけて食べるのが一般的。原料のデュラム小麦を粉にしてから粒状に成形している。

受講を終えて

アフリカ料理は初めての経験。しかも、「イモシを食べる」と聞いて、たじろぐ。「未開で野蛮というアフリカの一方的なイメージや偏見を相対化し、いきいきとしたアフリカの日常を伝えたい」と重田教授。つんと鼻を突く香辛料の刺激が食欲をそそる。ぱくりとドロワットを一口、「辛い! でも止まらない!」。4時間にわたる取材は、あっというまに過ぎた。

「先輩たちが同時多発的に調理をすすめる教室で、だれからなにを学ぶか、それもフィールドワークです。一回生は最初こそ不安げに先生の後にくっついてたが、「私もやりたい!」と、いつのまにか前のめりに。大学院への進学率が増すなかで、早い時期から大学院の授業にふれて知見を広げることが、進路選択のうえで大きな意味がありそうだ。(菜)



屏風に名を残した 京大教員たち

←荒木寅三郎 1866-1942
医学者。京都帝国大学医科大学教授、京都帝国大学医科大学長などをへて、1915年に初めての公選によって第7代総長に就任。写真は京都大学で開催された園遊会（現在の学園祭にあたる）でのひとコマ



↑内藤湖南(虎次郎)
1866-1934
東洋史学者。「湖南」は号。京都帝国大学文学部史学専攻教授。狩野直喜・桑原隲蔵らとともに「京都支那学」を創設し、「京大の学宝」とも称された



←濱田耕作 1881-1938
考古学者。京都帝国大学考古学研究室の初代教授をへて、1937年に第11代総長に就任。「考古学における京都学派」を形成し、日本の考古学研究の発展に貢献した。息子の濱田敦は日本語学者で京大教授

かつて旧制第三高等学校（三高）があった一角は、戦後は京都大学教養部が置かれ、近年「吉田南構内」として再整備された。その東側に隣接する「理容 美留軒」。創業113年のこの理容店に、著名な京大教員たちのサイン色紙を集めた屏風があるというのは「知る人ぞ知る」事実であった。屏風に仕立てられた経緯は不明だが、のびやかで個性的な筆跡には、「自由の学風」を標榜する京都大学の躍動感が満ちている

大学文書館 准教授
西山 伸



◎にしやま・しん
1963年、兵庫県に生まれる。1987年に京都大学文学部を卒業後、京都大学大学院文学研究科修士課程に進学。1993年に博士課程を単位取得退学し、京都大学百年史編集史料室助手に。2001年から大学文書館助教授に。専門は日本近現代史。共編著書に『田中秀央 近代西洋学の黎明—「徳い出の記」を中心に』（京都大学学術出版会）、「学校沿革史の研究 総説」（野間教育研究所）など。

二〇一二年二月、縁あって、「理容 美留軒」の店主の上田浩二氏より、一隻の屏風が京都大学大学文書館に寄贈された。長期間を経てかなり傷んでいたが、翌二〇一二年三月に無事に修復が終了した。

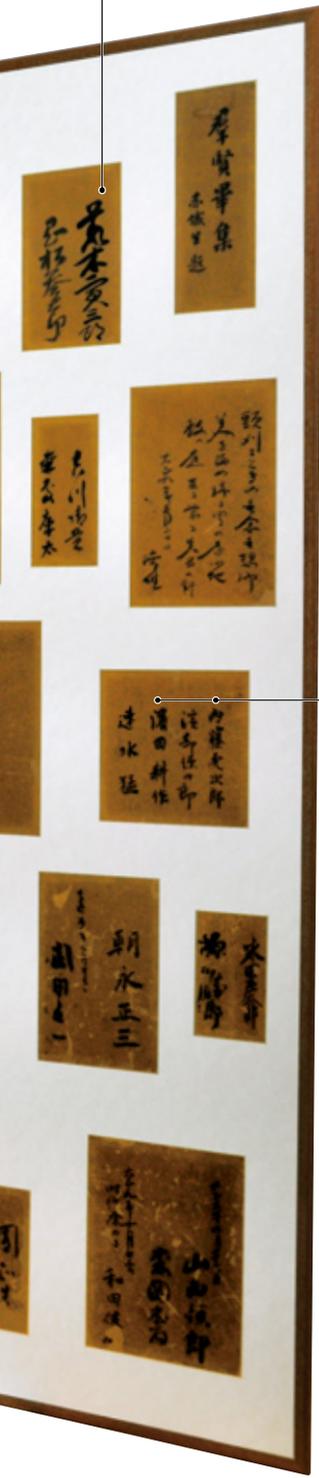
京大とともに
二三年を歩んだ理容店

屏風の形式は二面（扇）で二対をなす「二曲一隻屏風」で、一面の大きさは、縦五尺四寸（約一六四センチメートル）、横二尺六寸（約七九センチメートル）。そこに三五枚の色紙が貼り込まれている。絵画や川柳なども貼られているが、大部分は署名であり、

合計七四の人名（雅号のみ記されているものを含む）が確認できる。詳細はまだ調査中だが、このうち四九が京都帝国大学の教員経験者、四が事務職員、六が卒業生、四が三高教員の氏名であることが判明した。

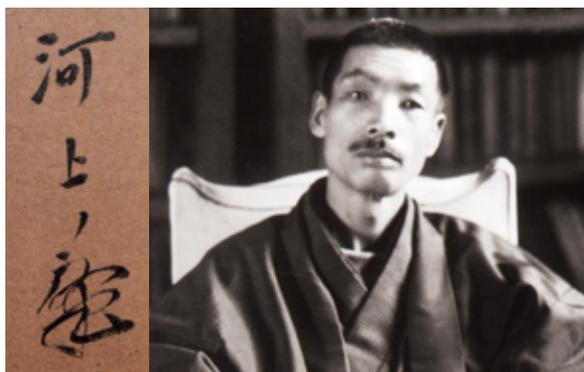
京都帝国大学の創立は一八九七（明治三〇）年、美留軒はその二年後の一八九九年に創業している。まさに京都大学とともに、一三年の歴史を刻んでこられたといってもよい（三高は、一八八九年に大阪から現在の京都大学本部構内に移転。その八年後に京大に敷地と建物を譲って南隣に移った）。

このころ三高生で、のちに京都帝



→「美留軒」の2階の住居で保管されていた修復前の屏風。初代店主の上田留吉氏は、当時京大の学生だった近衛文麿にサインをお願いしたこともあるが、近衛はサイン帳にならんだ名を見て、「こんなに偉い先生と名前を並べられない」と辞退。そのお詫びにと、ズボン2着が贈られたという

↓1920年代の正門 時計台が設置される前の校門風景。時計台が設置されたのは1925年。「大学改革の波」のなかで大学をまとめるシンボルとして設置された



↑河上肇 1879-1946
マルクス経済学者。京都帝国大学教授の職を辞し、共産主義の実践活動に入る。「美留軒」初代店主とは懇意で、食糧難の戦時中に、宮津出身の初代店主から河上に鯖を差し入れたという



3か月かけて修復された屏風。「京大に寄贈してたくさんの方に見ていただければ、祖父もよろこぶはず」と、上田氏

国大学の医学部教授になった松尾巖は、三高在学中のことを次のように回想しているが、創業直後の美留軒についてもふれている。

三高の東側に、俗に十三軒長屋とも三十三間堂とも云ふ同じ様な長屋が出来た。私が三高へ入学したのは(明治)三十四年であった。美留軒はそのころからあり、私達も散髪に行つた。丸刈で五銭位だつたと思ふ。その南に借樂堂その東に梅橋といふ洋食屋があつて、私達はよく行つたものである。私は昼飯は中大路の

大塚といふ處へ食ひに行つた。

『三高同窓会 会報第一〇号、一九五七年』

京大草創期を支えた個性豊かな教員たち

話を屏風に戻すと、名を残している京大教員たちはまさに多士済々と云える。荒木寅三郎(医)、濱田耕作(文)という二人の総長をはじめ、

東洋史の内藤湖南(虎次郎)、哲学の西田幾多郎(いづれも文)、マルクス主義経済学の河上肇(経済)、電磁気学の水野敏之丞(理)、病理学の藤浪鑑、解剖学の足立文太郎(いづれも医)、琵琶湖疏水を設計・施工した

田辺朔郎、機械工学の専門家で朝永振一郎の伯父である朝永正三(いづれも工)など、著名な研究者は枚挙に暇がない。

彼らはその研究活動のみならず、教壇で見せる顔も個性的だった。例えば内藤湖南については、次のような回想が残されている。

内藤先生の遅刻は十分や二十分のなまやさしいものでない。まづ一時間。二時頃になつて人力車でかけつけられて、紫の大きな風呂敷を開いて机の上へ何冊もの本をひろげられる。そしてその本の

京都大学大学文書館

京都大学大学文書館は、京都大学の歴史に係る各種の資料の収集・整理・保存・公開および調査研究を行うことを目的として、2000年11月に設置。資料の中心となるのは、京都大学の創立以来、日々の業務で作成された事務文書（法人文書）で、本学の軌跡を示すもっとも基本的な資料といえる。このほか、卒業生や元教職員などから寄贈された資料類（講義ノート、手紙、日記、ピラ、写真など多種多様）も多数所蔵。

合計約20万点におよぶ所蔵資料は、整理が済みしだい、閲覧室で一般の方も利用できる。本学の歴史に関する豊富な資料をもとに、常設展や企画展を開催したり、全学共通科目「京都大学の歴史」を実施しているほか、大学史やアーカイブズ学の研究などにも利用。

京都大学の歴史や、各種資料のご寄贈に関するお問い合わせは、京都大学大学文書館にお気軽にご連絡ください。



明治期の講義ノートのほか、大正期の卒業論文や、西田幾多郎教授のノート、湯川秀樹博士の論文など、貴重な資料を展示している

京都大学百周年時計台記念館 1階
TEL: 075-753-2651 FAX: 075-753-2025
Email: archives@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

- 開室時間 9時30分～17時00分
- 歴史展示室休室日 毎月第1月曜日/年末年始(12月28日～1月3日) ※第1月曜日が祝日の場合、第2月曜日休室
- 閲覧室休室日 土日祝日/年末年始/京都大学創立記念日(6月18日)
- 入場無料

- *1 49名のうち唯一の例外は岡松参太郎のみ。法学部教授として1913年まで在職し、1921年には死去している。
- *2 濱田敦（はまだ・あつし、1913-1996）。京都大学名誉教授。父は11代目京大総長の濱田耕作。
- *3 卒業式廃止の理由は、「卒業式を行うことによって学問が終了する印象を学生にもたせるから」であった。同時期に東京大学でも廃止されている。その後、1927年に復活。

あちこちを見ながら講義をはじめられる。先生の講義は宵越の講義ではない。教壇に立つてから学生の面前で講義を作ってゆかれるのである。

澤瀉久孝「亡き先生と私」、
『京都大学文学部五十年史』、
京都大学文学部、一九五六年

荒木寅三郎については、次のようなエピソードがある。

先生は「中略」悠容迫らぬ態度で教壇に立ち、極めてユツクリと講義を進める。先生には別に講義用のノートとはなく、時々名刺大の紙片を出して、それを見詰め乍ら講義したが始めから終りまで理路井然として、その一語々々が立派な文章となつていった。黒板に書かれる文字（独語）も暢び／＼した達筆で、書体としても立派であり、時には僅に一

語で黒板の横巾一つばいに及んだこともある。

古武弥四郎『荒木寅三郎』
金原出版、一九五七年

どちらも、草創期の京大におけるのびやかな雰囲気、型にはまらない教員たちのようすが窺えて興味深い。

「淋しく暗い」東大路

これらの色紙はいづころ書かれたのだろうか。日付の記された色紙が九枚あるが、それらはいずれも「大正九年」（一九二〇年）、「大正一〇年」、「大正一一年」に集中している。四名のうちのほとんどの教員はこの時期に京大に在職していることから、色紙の多くはこのあたりに書かれた可能性が高い。
一九二〇年代前半、京大の周辺はまだまだ「田舎」だった。路面電車は熊野神社から北にはまだ通じていなかったし（百万遍まで通じたのは



美留軒店主と西山先生「美留軒」にて。1955年ころ、現店主の上田浩一氏が三代目を継がれる。現在も散髪に訪れる京大の教授や職員のサインを集めている。「私は屏風に貼らず、店の壁に飾っています」

一九二八年）、現在の北部構内にあたる区域も、ようやく京大が取得したばかりであった。

戦後に文学部教授となった濱田敦^{＊2}は、当時はまだ小学生で、自宅から小学校までの近道にあたる本部構内を毎日歩いて通学していた。次の回想にもその「田舎」ぶりが表れている。

今の西部構内に当たるところには、工芸繊維大学の前身高等工芸学校があり、大学との間に細い道が通じていました。淋しく怖い道で、遠足か何かでまた大学開門前の早朝など、どうしてもそこを通らなければならぬときは、どろどろ五燭ぐらいの電灯のともっている薄暗いなかを夢中で走って通ったものです。

濱田敦「道草」『以文』
第二〇号、一九七七年

車の絶えることのない現在の東大路通しか知らない身には、想像がつかない情景である。

改革の波のなか 教員たちはなにを思う

ところで、京大にとってこの一九二〇年代前半とは、もしかしたら現在に匹敵する「大学改革の時代」だったかもしれない。第一次大戦後の一九一八年

二月には大学令が公布され、初めて公立・私立大学が認められた。と同時に当時の原敬内閣によって高等教育機関の大拡張が実施されていた。こうした状況のなか、京大では、一九一九年に卒業式が廃止され、一九二一年には従来の九月入学が四月入学に移行、一九三三年には定年制（六〇歳）が初めて施行されるなど、今日にもつながるような制度改革が次々と実施された。また、経済学部（一九一九年）、農学部（一九三三年）といった新学部の設置も相次いだ。

美留軒で散髪してもらい、屏風に名を残した教員たちも、こうした改革の波のなかでそれぞれの職務を全うしていったのであろう。彼らの名が記された屏風を見るだけで、さまざまな場面が連想されるのである。

なお、この屏風は、二〇二二年二月五日より開催予定の大学文書館企画展「屏風に名を残した京大教員たち」で展示する予定である。

地道な作業の積み重ねが フィールド科学の発展につながる

藤井弘明

京都大学フィールド科学教育研究センター
上賀茂試験地 技術専門職員班長

吉田キャンパスから北北西に直線距離で五キロメートル、京都ゴルフ倶楽部の東に広がる約四七ヘクタールの森は、京都大学フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地。植物学や生態学、農林業を専門にする研究者たちの現場だ。この広大な里山を維持・管理し、研究の基礎データを収集する技術職員たちの実直な仕事は、京都大学の「知」をささげている。

八〇〇種の樹木を育成中

上賀茂試験地は、農学部附属演習林の試験地として、一九二六年に創設された。演習林は、農学部林学科の研究と教育の場であり、有用な木材を生産する財産林でもあった。試験地は、そうした木材生産などの技術開発や森の維持・管理方法などの基礎的な研究をおこなう場として設置された。二〇〇三年に京都大学フィールド科学教育研究センターに統合され、里域ステーションの中心的役割を担っている。



◎ふじい・ひろあき

1965年に福井県に生まれる。北海道研究林標茶地区、芦生研究林、和歌山研究林、北白川試験地勤務ののち、2012年4月から上賀茂試験地に。2009年には、「森林生態系のモニタリングサイトの設定と観測体制の整備に多大な貢献をした」とことなどが評価され、全国大学演習林協議会の「第11回森林管理技術賞」を受賞。

敗戦からの復興期には、衰退した森林の再生が主要テーマであり、その一環として外国産樹種の導入と育成が主な研究課題だった。世界一〇〇か国の研究所と種子を交換し、約

八〇〇種以上の樹木を育てているほか、施設内の「標本館」には二万点の標本を展示している。とくに力を注いでいるのはマツ属。「世界には約一〇〇種のマツがあるのですが、そのうちの約七〇種がこの森で育っています。メキシコ産やカリブ産など、日本の気候には合わない種類の苗木は、「ガラス室」とよばれる温室で原産地にちかい環境を保って育成中。「全種類のマツをここに集めたいな」。

天然生林の生態データを収集

総面積の六五パーセントは、ヒノキとアカマツを中心に広葉樹が混交する天然生林。この日の藤井さんの午

前の仕事は、この天然生林の生態調査。森を歩いて、木々の生長や微生物の生息状況、シカやイノシシなどの害獣の影響を確認する。「来る日も来る日も、この地道な作業の繰り返しかえしと、日焼けした顔でにっこり笑う。木にももちろん個性はあって、同じ樹種でも育つ環境で樹形は異なる。「毎日眺めているうちに、『お気に入りの木』ができるんです」。午後

は収集した調査データをパソコンに入力。「こうした積み重ねが、『人間と自然の共生』の実現につながると信じています」。

最近の悩みのタネは害獣被害。シ

カやイノシシは、試験地の周囲に張り巡らせたフェンスを突き破って侵入し、樹皮や新芽を食べて森を荒らす。敵もさるもの、フェンスの形状や強度を改良してもまた破られる、イタチこっこが続いている。

京都市を囲む三山では近年、マツ枯れとナラ枯れの被害が拡大。上賀茂試験地も例外ではない。六年前にナラ枯れが見つかった以来、被害の拡大を防ごうと、職員たちはさまざまな策を講じている。

その一つは、幹にポリエチレン製の透明なフィルムを巻きつけて、ナラ枯れの原因となる昆虫が樹幹内に侵入するのを防ぐというもの。単純だが効果は抜群。「人間が一本一本守ってやらないと枯れるというのも困ったものだね」。NPO法人芦生自然学校が取り組むナラ枯れ防止の事業にも参画し、この予防策の有効性を積極的にアピールしている。

こまやかな配慮で森を手入れ

この森には、近隣の京都産業大学や京都府立大学などの学生も訪れて、樹木の識別や剪定方法、野生動物の痕跡調査などを学ぶ。「研究者や学生たちが利用しやすいように管理するのも私たちの仕事です」。柴刈りや剪定、道路の修復など、作業の領域は広い。「ここは教育と研究のための森林ですから、剪定といっても植木職人とは目的がちがう。樹木を調べやすいように、手の届く高さの枝を残すんです」。ユニボやブルドーザーでの道路整備は藤井さんの得意分野。「長雨が続きと山道は崩れやすくな

* マツ枯れはマツノマダラカミキリを介してマツノザイセンチュウが樹幹に入り込んで増殖することで起こる病気。ナラ枯れは、カシノナガキクイムシを介して病原菌が幹内に入り、形成層を破壊することが原因。



◀「この太さの木なら、15分でフィルムを巻けます」と藤井さん。「地際まできっちり巻くのがこつ」

▶ 森の再生と維持のメカニズムを解明するために、この森の優先的な樹種の、種子から芽生えの動きを追跡している。指さしているのはヒノキの芽生え



るので、定期点検は欠かせません」。藤井さんたちのこまやかな心づかいが、未来の研究者の成長をささげている。大学の卒論のテーマに林業を選んだことが、この仕事に就いたきっかけ。「やめたいと思ったことはないね。木はしゃべらないから、人間を相手にするよりもずっと気楽。この仕事は性にあってるのかも」。足袋型の長靴に履き替え、大型のシャベルをひょいと担ぎ山道を行く姿がたのもしい。背中には京都大学の「未来」も背負っていた。

厚生労働省が医薬品、医療機器開発促進のための「臨床研究中核病院整備事業対象機関」に医学部附属病院を選定

厚生労働省は、日本発の革新的な医薬品・医療機器の創出等を目的に、国際水準の臨床研究、難病等の医師主導治験および市販後臨床研究等の中心的役割を担う「臨床研究中核病院」の整備事業を実施しています。その対象機関(全5機関)の選定にあたって公募が行なわれ、51機関の中から、2012年5月25日(金)、京都大学医学部附属病院が選定されました。

選定された五つの機関は、①みずから国際水準の臨床研究等を企画・立案し実施するとともに、他の医療機関が実施する臨床研究を支援できる体制、②倫理性、科学性、安全性、



信頼性の観点から適切かつ透明性の高い倫理審査ができる体制、③関係者への教育、国民・患者への普及啓発、広報体制、などの基盤構築を行ないます。

また、厚生労働省から5億円程度を上限とした基盤整備に必要な事業費の補助、整備事業と連動して国際水準の臨床研究等を行なうための研究費の補助があります。補助期間は2012年度からの5年間で予定されています。



「Kyoto University Academic Talk」
2012年4月4日～2013年3月27日
毎週水曜日(祝日および年末年始を除く)の
15:20～15:40(20分間)放送

ラジオ・コーナー「Kyoto University Academic Talk」放送

京都府を中心とする関西圏を放送エリアとする地域ラジオ局「α-STATION(アルファステーション)」(エフエム京都)との協力により、京都大学のタイアップ・コーナー「Kyoto University Academic Talk」を2012年4月から放送しています。午前11時から午後4時まで放送の「SUNNYSIDE BALCONY」の番組のなかのコーナーで、毎回1名の本学教員が生出演し、担当DJとの対話を通じて、自身の研究をわかりやすく、魅力的に紹介します。

このラジオ・コーナーは、2011年11月2日から2012年1月25日までの3か月間に全10回放送されたエフエム京都とのタイアップ・コーナー「Kyoto University Academic Talk」が好評だったことをうけて、2012年度の1年間、継続して放送されます。本学で行なっているさまざまな研究を、多くの方がたに知っていただく機会になればと考えています。

京都大学同窓会だより

第7回京都大学ホームカミングデイの開催

今秋11月10日(土)に開催する第7回京都大学ホームカミングデイは、「今を見つめ、未来(あす)を考える」をテーマに、ジャーナリストの鳥越俊太郎氏の講演会のほか、京都大学交響楽団による演奏会、ノーベル賞受賞の湯川秀樹博士ゆかりの旧工学部石油化学教室(階段教室)での授業体験などのイベントを準備しています。同窓生(卒業生、元教職員)のみなさんは、ご家族、ご友人をお誘いあわせのうえご参加ください。お待ちしております。

イベントの具体的な内容は、京都大学同窓会ホームページをご覧ください。

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/alumni/>

「清風荘」が重要文化財に指定

2012年7月9日付けで、京都大学所有の「清風荘」が重要文化財(建造物)に指定されました。

清風荘は、1732(享保17)年ごろに徳大寺家の別邸として建築されたものです。その後、元公爵西園寺公望の京都別邸として使用されました。西園寺公望の没後は住友吉左衛門氏によって保管されていましたが、1944(昭和19)年6月に住友家から本学に寄贈され、教育、迎賓、会議施設として利用してきました。

とくに邸内の茶室と改築された庭園は名高く、明治から大正時代にわたって令名を馳せた七代目小川治兵衛氏(通称、植治)の作庭で知られています。

この庭園はすでに1951(昭和26)年6月9日付けで名勝指定を受けていましたが、清風荘の建造物は2007(平成19)年5月15日付けで登録有形文化財(建造物)に登録されました。今回の指定により、本学所有の建造物としては初めての重要文化財(建造物)となりました。



名古屋(愛知)地区連絡会が発足

2012年5月31日(木)、名古屋(愛知)地域に在住する卒業(修了)生16名と京都大学関係者が名古屋市内のホテルに集いました。同地域に在住または勤務する卒業(修了)生相互の連携および京都大学との連携強化に関する活発な意見交換会を行ない、名古屋(愛知)地区連絡会を発足。今後は、定期的に連絡会を開催します。



←意見交換会
↓参加者全員による
記念撮影



鳥越俊太郎氏

一昨年、昨年に引き続き暑いことこの上もなかった夏もようやく峠を越えたようです。心配された計画停電も実施されることもなく、これもひとえに多くの方々の節電の努力によるところと思います。お疲れ様でした。

さて、日本人選手団の活躍に寝不足を招いたロンドンオリンピック・パラリンピックも終わり、秋の訪れとともにお届けしました『紅崩』22号、いかがでしたでしょうか？

巻頭対談で総合博物館の設立秘話とそのユニークな展示や活動を。続いて、人文科学研究の古代中国国家の成立に関わる食料事情から、シルクロードを横断してガンダーラの石窟研究。そして、「授業に潜入！」では現代に伝わるアフリカ伝統食に注目した文化論と、「食」にまつわるお話を二つの切り口から論じます。また、上賀茂試験地の紹介など、いずれもフィールドワークを基本とした成果で、世界中に広がる京大の活動範囲の多様性を実感されたことと思います。文中でも「探検大学」と表現されているように、「まずは現場にいったらどう？」は京大の学究精神の一つの柱になっているようです。悪く言えば落ち着きの無さとも言えないこともない、このような「やんちゃな」学風は今も京大の至る所に見ることが出来るでしょう。

「3,800平米で博物館が出来るか!!」と突き返した？ のは、かっこいいですね。では実際の博物館はどれぐらいの面積になったのでしょうか？

正解は博物館 HP へ!? いえいえ、気候も丁度良くなってきたことですし、フィールドワーク気分を味わいに、博物館までお出かけしてみるといいかでしょうか。現場にいけばただの数字では分からない発見がきっとあることでしょう。

2012年9月
広報委員会『紅崩』編集専門部会

京都大学広報誌 **紅崩** 第22号
2012(平成24)年9月25日発行

編集・京都大学広報委員会
『紅崩』編集専門部会

発行・京都大学渉外部広報・社会連携推進室
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-2071
FAX 075-753-2094
URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/>
E-mail kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

制作協力 京都通信社
デザイン 柴永事務所

『紅崩』の既刊号は、次のURLで閲覧できます。
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/issue/kurenai/>

©2012 京都大学 (本誌記事の無断転載・放送を禁じます)

京都

大学の

動き

News
&
Information

京都大学・大阪府教育委員会 連携協定を締結

松本紘総長、中西正人大阪府教育委員会教育長、兵庫将夫天王寺高等学校長ら出席のもと、京都大学と大阪府教育委員会との連携協定ならびに大阪府の進学指導特色校(GLHS: Global Leaders High School)との連携協力の覚書に関する締結式を、2012年2月16日(木)に百周年時計台記念館国際交流ホールにて挙行了しました。

この協定は、大学および高等学校における教育の課題に関し、大阪府教育委員会と本学とが連携して教育および研究の充実、発展に資することを目的とするものです。GLHSとの覚書は、本協定に基づいて本学の教育および研究活動への理解を深めていただくとともに、本学がGLHSにおける教育の充実と発展に資することを目的としています。

本学と教育委員会との連携協力に関する締結は、京都府教育委員会、京都市教育委員会につづき、3件目となりました。



中国教育大臣が表敬訪問

2012年5月24日(木)、袁貴仁中国教育大臣ほか7名および大使館関係者7名が、松本紘総長を訪問されました。

中国教育大臣一行は、まず京都大学附属図書館の貴重図書等を視察されたあと、百周年時計台記念館迎賓室にて松本総長らと会談されました。本学の概要および主要な研究施設等について松本総長が紹介したのち、増加する日中の学術交流の今後についての意見交換が行なわれました。

その後は、本学所有の「清風荘」に一行を招いて昼食会を開催しました。和やかな雰囲気の中、お互いの教育哲学や大学運営に関する考え方についての意見交換が行なわれ、かつて北京師範大学の学長を務めていた袁大臣の話に、松本総長も深く傾いていました。

昼食後、同一行は松本総長の案内で、小川治兵衛氏の手がけた「清風荘」の日本庭園等を視察し、その美しさに改めて感銘を受けていました。

「京大日食展 コロナ百万度を超えて」、「金環日食観察会と講演会」を開催

2012年5月21日(月)、京都では282年ぶりに金環日食を観察できました。京都大学では、この一大天文イベントにちなんで、4月25日(水)から5月20日(日)まで、総合博物館で「京大日食展 コロナ百万度を超えて」を開催。日食当日の5月21日は、午前7時から農学部グラウンドで「金環日食観察会」を実施したあと、百周年時計台記念館で講演会を開催しました。

晴天に恵まれた観察会には、約8,000名の参加がありました。参加者たちは日食めがねを手に、金環の見えるようすを観察し、歓声を上げていました。また、観察会用に理学部附属天文台が特別に設置した屈折望遠鏡には、長蛇の列ができました。



追憶の京大、逍遙◎ジェラール・フィリップが 京都に来た夜

京都に来た夜

山内久司
朝日放送顧問



◎やまうち・ひさし
1931年11月9日、大阪市に生まれる。花園大学客員教授。大阪府立市岡高校を卒業後、京都大学文学部に入學。フランス文学専攻。1955年に朝日放送に入社。ラジオ制作部をへてテレビ制作部に。ドラマのプロデューサーとして数々の番組を担当する。おもな作品に、「必殺シリーズ」、「ザ・ハンガマン」、「月火水木金金」、「お荷物小荷物」など。制作部長、制作局長、取締役常務、代表取締役専務などを歴任。2001年退任。

三回生のときと記憶している。一九五三（昭和二八年）である。フランス文学専攻の教室に顔をだすと、関西日仏学館にジェラール・フィリップが来て、詩の朗読をするという。仏文の学生たちは喜んだ。

ジェラール・フィリップといえは当時、フランス映画を代表する二枚目である。ジャン・マレー、ジェラール・フィリップ、アラン・ドロンとフランス映画の二枚目の系譜は続く。『パルムの僧院』、『輪舞』、『肉体の悪魔』、『花咲ける騎士道』、『赤と黒』などの代表作がある。その実物を身近で見ることが出来る。仏文の学生たちは、伊吹武彦教授と一緒に関西日仏学館におしかけて前の席を埋めた。映画青年であった僕は一番前列の中央に座った。フランスを代表する二枚目をつぶさに観察しようと思ったのである。これが軽率であつたとあつて思い知るようになる。

目の前に現れた銀幕のスターに興奮する。前の空間に、ジェラール・フィリップが現れた。僕の一メートル前にジェラール・

フィリップその人が立っている。瀟洒なジャケットをきた背の高い、いかにも小粒な姿であつた。僕たちは興奮していた。

やがて、詩の朗読がはじまつた。ボードレールの「信天翁」という詩である。実のところこの詩は『悪の華』（ボードレールの詩集の演習で習つたばかりの詩であつた。僕は安心した。これならわかる。静かな響きのいいフランス語が聞こえてくると予想していた僕の耳に激しいフランス語の絶叫に



近い音が飛び込んできた。そしてジェラール・フィリップは大きな身振りで、僕の前身もだえている。

ヨーロッパの激しい感情表現に圧倒される

「信天翁」という詩は、天空を二メートルも羽を広げて飛ぶ信天翁が船員たちに甲板に捕らえられて無様なさまをさらす。詩人の魂が現実には敗れ去る様子象徴した詩であると記憶している。敗れ去った詩人の魂を象徴する信天翁の姿を演じているのか、彼は大きく身もたえながら、詩を大声で叫ぶのである。

なぜか僕は気恥すかしい気持ちになつた。てれくさなつたといつてよい。そのときである。ジェラール・フィリップの顔が僕の三〇センチメートルの前まで近づいてきて、片手で顔を覆うようにして悲しげな声でうめくように朗読するのである。彼の唾が飛んできてもうな距離である。ほんとは飛んできていたのかもしれない。それほど激しい朗読であつた。僕は顔をあげる事ができなかった。この席に座つたことを後悔していた。それは一分も続かなかつたかもしれない。

い。しかし僕には長い時間を感じられた。その席から逃げだそうと思つた。やがて朗読は終わった。朗読というよりは一幕の芝居を見たようであつた。朗読のあとと彼と話し合つたが、もちろん伊吹教授の通訳であるが、物静かな青年であつた。僕はヨーロッパ人の感情表現が、いかに我々日本人と違うかを身をもつて感じていた。

興奮していたのであろうか、その夜、僕はちば木屋町で飲むことになつた。現在とは全く違う町並みであり、静かな雰囲気のある街であつた。安い酒とわずかな肴で僕たちはフランス映画や文学のことを興奮して喋つた。当時の学生は今の学生と違って議論するしか藝がなかつた。誰もジェラール・フィリップの表現には驚いていた。幼稚で舌足らずの議論を長い時間続けた。

そのころの飲み屋さんには学生に寛容であつた。わずかの飲み食いで長時間席を占領することを許してくれた。京都の学生の特権であつた。それは貧しいけれど青春の謳歌であつた。冥は果て、僕た

ちは三々五々夜の街に消えていった。ふと気がつくと、僕と女子学生と二人になつていた。四条大橋を二人で渡つた。暗い場所が来た。僕はどきどきした。フランス映画の男女のように僕は彼女の肩を抱き寄せようと思つたが、勇気がなかつた。暗闇はとおりにすぎた。僕はそれらぬ顔をして彼女を京阪電車の駅まで送り、四条大宮に向かつた。当時は阪急電車は四条大宮までしか来ていなかった。僕は朴蘭の下駄をならして夜の四条通をひとり歩いて歩いた。

『必殺シリーズを創つた男——カルト時代劇の仕掛人、大いに語る』(洋泉社、1997年) 『必殺シリーズ』生誕25周年記念に、『必殺シリーズファンクラブ』との会長の山田誠二氏との共著で刊行。「お荷物小荷物」にはじまる一連の「脱ドラマ」を送り出し、「ドラマの神様」と称された山内氏が、「必殺仕掛人」から「必殺仕事人」まで、「必殺シリーズ」制作の内幕を明かす



*1 関西日仏学館

京都大学西部構内に南接する、日本とフランスの交流拠点。フランス文化にかかわる講座やイベント、情報発信をおこなう。1927年に京都市山科区九条山に創設され、1936年に現在地に移転。

*2 伊吹武彦 (1901-1982)

京都大学名誉教授。戦後まもなく、文芸誌『世界文学』を編集し、近現代フランス文学を紹介。生島遼一、桑原武夫とともに京都大学のフランス学を形づくつた。

ジェラール・フィリップ

(1922-1959)
フランスの俳優。カンヌ出身。『肉体の悪魔』(1947)で人気を不動のものに。「フランスのジェームズ・ディーン」とも呼ばれ、1950年代のフランス映画界で二枚目スターとして活躍。1953年10月、東京で開催された「フランス映画祭」のゲストとして来日した折に、関西日仏学館を訪問し、詩の朗読を披露した

映画『赤と黒』より
配給：セテラ・インターナショナル
©1964 Gaumont - Document Films



京都大学広報誌
系エ前 第22号
2012(平成24)年9月25日発行
発行●京都大学渉外部
広報・社会連携推進室